女鑑

第百五十[illegible]號

東京國光社

女鑑第百五拾四號

目録

高臺湖月院



奢侈をやめよ

山の黄金も、採りてやまされば、終に空しからざるを得ず、盡きぬものにたとへたる泉の水とて、くみとくめば、くみ盡くさざるにもあらず。まして、一身の財、一家の財、一國の財をや。もとより限りあるものなれば、容易くつかひもつくすべし。一身奢侈に耽らば、一身の財は、忽に空しかるべく、一家奢侈に耽らば、一家の財は一朝にして破れ、一國奢侈に耽らば、一國の財は一夕にして盡くべし。財は一身を成し一家を立て一國を存せしむるものなれば、財つきては、一身も一家も一國も、やがて立ち行く事かなはざるべし。されば、奢侈は極めて恐るべく、極めて戒むべきところ。

さるに、近時の風俗を見るに、女子のみにはあらねど、日に月に奢侈に傾き行く

が如し。此の頃の女子が、物見遊山に出で立つ裝ひを見よ。玉の簪、錦の衣、黄金の帶、栴檀の木履、花やかに、あでやかに、きらゝかに、さながら光りかゞやきて、目もまばゆきばかりのさまして、ねりありく者、皆、然らざるなし。甚しきに至りては、一筋の帶に、百金を費し、一重ねの衣服に千金を投ち、一本の簪に數百金を費やし、一双の木履にさへ數十金を投つ者さへ耳にす。甚しき限りならずや。

女子は、もとより身を美はしうせざるべからず。然れども、身を美はしうするといふ事は、身をやさしう清らかに、よく正しくつくろひて、取り亂れたる見苦しき姿せぬに在り。かく徒らなる玉をちりばめ錦を飾り立てよといふにあらず。よしや、いかばかり玉を飾り錦をまとひたりとて、見苦しき亂りなるは、何處までも見苦しき女子にて、決して、美はしき女子とはいふべからず。今日の風俗の如きは、女子たるべき身のたしなみにはあらずして、實に奢侈とこそいふべきなれ。身を美はしうするたしなみにはあらずして、身を破る奢侈といふものなれ。身を

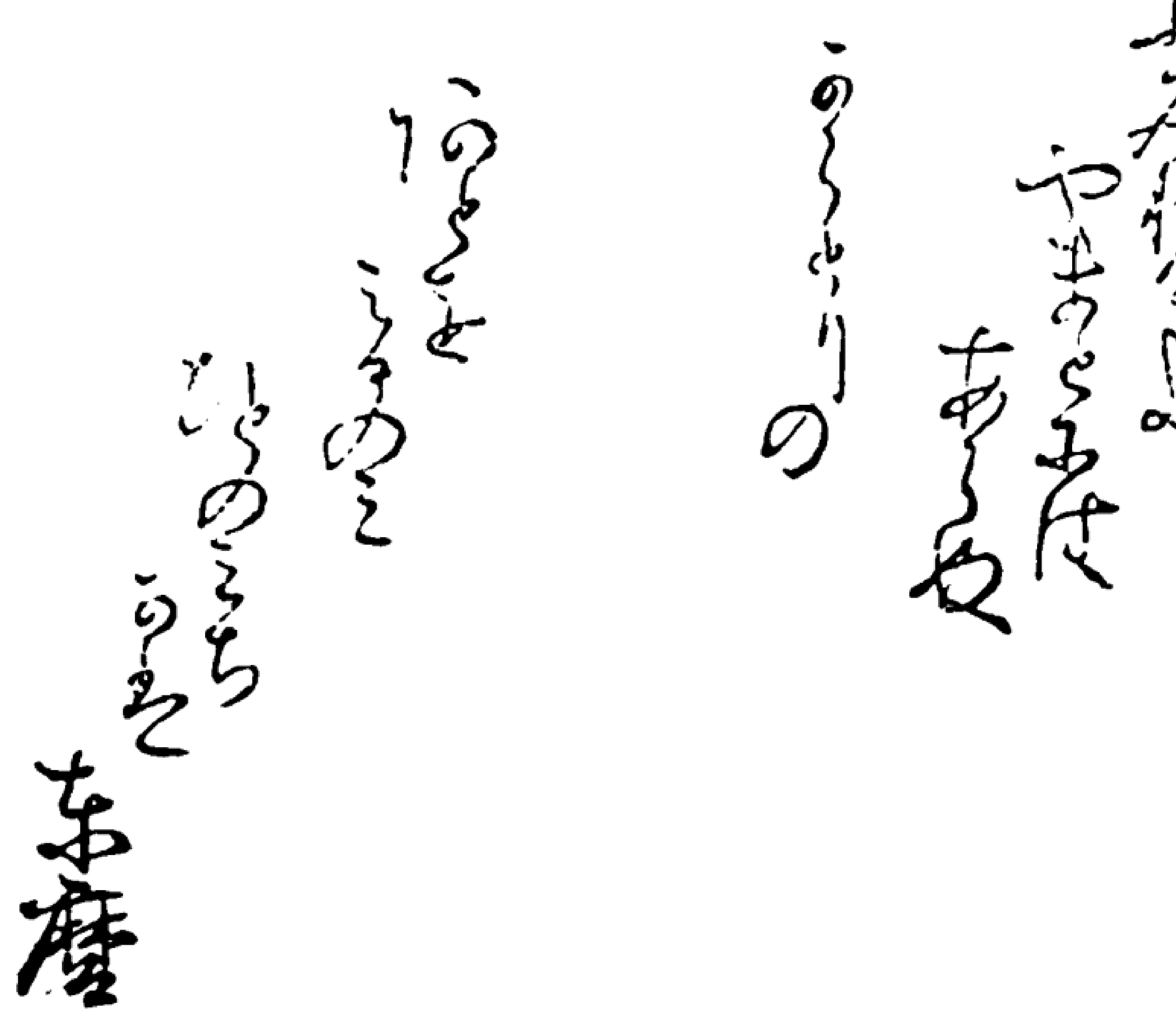
破るのみにはあらず、一家を破り一國を破る奢侈といふもののみ。悲しむべき風俗といふべし。

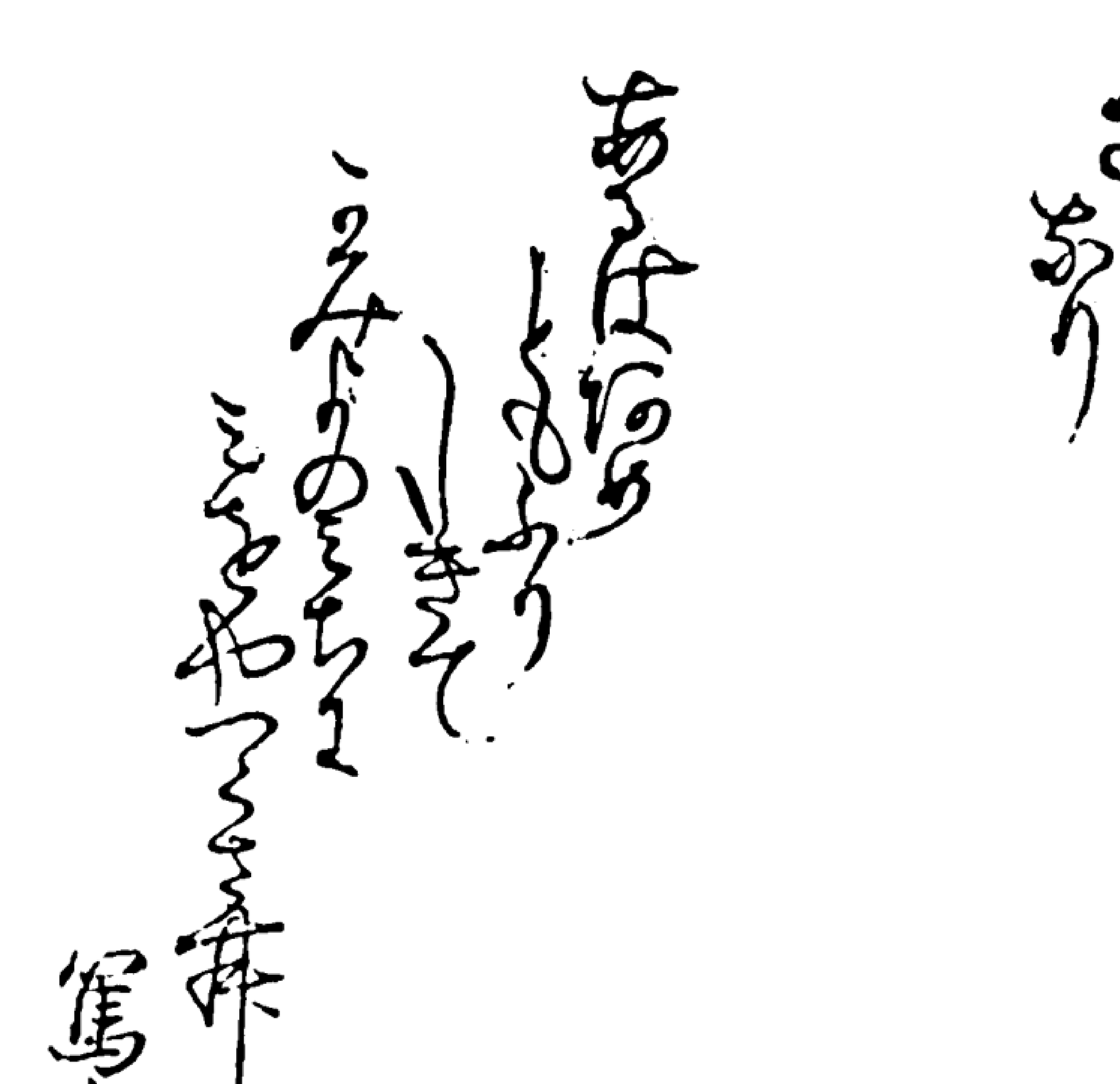
かばかりの財あらば何ぞ、これを以て哀れなる同胞の寒苦を救はざる。寒暑を凌ぐべき衣服も無く、飢餓をまぬかるべき食物をさへに欠ぎたる同胞の窮状を救はざるや。なほ進みては、何ぞ、これを以て、多端なる今日の國家の御藏に貢ぎて、國力の萬分一をも補はむとはせざる。身に家に餘る物ありながら、同胞の窮を救はず、國家の爲めに盡くさず、徒らに一身一家の奢侈にのみ耽るが如きは、實にあきれはてたる下等人物といふべし。

なほ、奢侈は流行し易きものにて、一人これを爲せば、一家に及ぼし、一家これを爲せば、一鄕に及ぼし、一鄕これを爲せば、一國に及ぼし、富める者これに耽れば、貧きも、これをうらやみ、上これを行へば、下これに倣ひ、其の弊は、つひに一國の力を破り去るものなり。故に、人々各自に愼まざるべからず。

しかも、奢侈は、たゞに其の財を破るのみにあらず、また、これが爲めに、人を

して虚僞をはからしめ、惡事を爲さしめ、人非人の魔界に墮落せしむるものなり。衣服は身を淸らかにつゝめば、足れり。飮食は身を健やかに保てば、足れり。其の餘りあらば、衣食乏しき同胞を救へ、なほ餘りあらば、多端なる今日の國力を補へ、これ實に臣民たる分なり。奢侈をやめよ、奢侈をやめよ、やめて、汝が臣民たる分をつくずに用ひよ。





論説

朝鮮留學生の保護に就きて我が貴婦人社會に望む

鹿山

目下我が邦に留學中なる朝鮮の學生は、本國より學資支辨の途を絶たれたる爲め、大に窮困に陥りつゝあり、初め留學せるもの七十三名ありしが、其の内三名は歸國し、三十名は慶應義塾より、二十一名は成城學校より、五名は大藏省有志者より、五名は本願寺より、二名は王子製紙所より、二名は山縣悌三郎氏外一人の有志者より、一名は警視廳有志者より一名は東京法學院より、夫れ〲扶助を得たれども、尚は殘る九名は昨今衣食にも差支へ居る有樣なりと云ふ、是れ豈に慈眼を有する日本婦人の默々看過すべき事ならんや。

我が邦に留學せる朝鮮の學生は、最初孰れも本國より學資を給せられたるものにして、毫も日本人の補助を求めざりしものなり、然るに意外の事變本國に起れるよりして、突

然其の學資給與の途を絶たれ、曾て豫想だもせざる奇禍に罹りたるものとす、其境遇亦憐むべきならずや。男子素より屍を馬革に裹むの勇氣なかるべからず、骨を青山に埋め死を鴻毛に比するの覺悟なかるべからず、一時の窮苦を以て、女子の扶助に依るを愧づ、然れども、目下朝鮮留學生の境遇たるや、之れと稍や趣を異にし、彼等は前途大なる希望と責任とを有し、今日始めて其の首途に就きたるもの、此の際若し其の學業を中止し、本國に歸るが如きあらんか、彼の希望責任は將た何の秋を以てか之を遂行するを得んや、其の心事實に憫むべし、其の心事憫むべきが故に、其の境遇は我が博愛なる姉妹諸子の一臂を勞すべき必要ある也。

朝鮮人若くは支那人とし云へば、日本人は幾分か之を蔑視するの傾きありと雖も、之を蔑視するは蔑視する者の謬見のみ、吾人は之を蔑視するよりは寧ろ之を開導せざるべからず、愚は之を諭し、弱は之を扶け、後進の國民として先輩たるの義務を盡すべし、然り而して彼の朝鮮留學生なるものは、其國家の爲め、其社會の爲め、新文明を輸入するの機關車を以て自ら任じ、迷霧濛々たる朝鮮社會より脱出し、健氣にも日本に來て新教育を受けんとす、顧ふに方今の朝鮮は、宛かも維新前後の日本の如し、彼等朝鮮學生の日本に遊學するは、明治の初年我が邦の有志が歐米に留學せると一般にし

て、日本今日の文明富强は、實に當時歐米に遊學し、新智識を得たる者の盡瘁に出でたりとせむ、朝鮮將來の進步發達は、亦必ずや現今我が邦に留學する學生諸子の經營に成るべきを知る。

七十名の朝鮮留學生は朝鮮の現勢に對して何等の影響を與へず、然れども、將來の朝鮮に於ける各種の文明事業は、悉く彼等の掌裡に歸し、有爲の政治家も此の内より出で、卓越の實業家も彼の間より起るべし、加ふるに彼の留學生たるや、多く朝鮮貴族及有志者の子弟に屬し、後來朝鮮の國運を左右すべき位置資格を具ふ、龍卵雛鳳之を孵化するに日本の學術を以てし、之を發育するに日本の思想を以てし、而かも其患難に臨み、之を救護するに日本婦人の熱腸義腕を以てす、朝鮮人にして精神あらむ、永く日本の恩義を銘知すべきなり。又縱令朝鮮人にして必ずしも其報恩應義を計らざるも、日本にて修得せる所の學術思想を以て將來朝鮮の改革に從事せむ、東洋の文明上に於て吾人は毫も遺憾なかるべし、二千萬の我が同胞姉妹諸子よ、諸子若し朝鮮の國情に察し、其の留學生の不幸憐むべきを知らむ、漫然之を馬耳東風視する事なかれ、否、進て熱血を澆き義腕を揮ふべし。

我が姉妹諸子は相協力し、七十名の朝鮮留學生を悉く保護するの俠骨あるか、無きか、

果して斯の俠骨あらば、吾人は直に之を事實に示さん事を望む、若し斯の俠骨未だ軟弱ならんか、吾人は實に一日も早く之を琢磨活用せん事を責む、七十名の朝鮮學生、之を日本男子の保護に依賴せず、日本女子の義腸俠骨を以て之を扶持す、世界の慈善事業上に於て豈一大新機軸を開かずと云はんや、抑、朝鮮留學生の窮厄を救ふは、是れ朝鮮國民を救ふなり、朝鮮國民を救ふは、是れ世界の慈善事業を奬勵するものなり、果して然らば、日本女子の慈善的事業は、宇內慈善事業中の最も高等多望なる種類に屬せん、蓋し七十名の學生に要する經費は、一人一個月十五圓として每月一千五十圓、一個年一萬二千六百圓、之を五個年と假定すれば、總額六萬三千圓と爲る、苟も朝鮮國民を救ふが爲め、世界無比の慈善事業の爲めに、一個年僅々一萬二千六百圓を投ず、日本女子の活動力豈斯の少額の慈善費に堪へざらんや。

然れども朝鮮留學生の過半數は、既に朝野有志の扶助に依て其學途に就けり、殊に婦人社會の助力を籍るの必要なきを見る、吾人が玆に說く所のものは、未だ保護の計なき少數の留學生に在り、斯の少數の窮學生を救護するが爲め、吾人は有志の貴婦人首唱して爰に朝鮮留學生保護會なるものを設立せん事を勸告す、乃ち十名內外の學生を保護する經費の如きは、我が貴婦人社會の協議を以て容易に之を支辦し得べきを信ず

れば也、今日我が邦女子の盡力する慈善事業一にして足らず、其効績亦頗る觀るべきものあり、然れども吾人は信ず、我が邦從事の諸慈善事業中、未だ曾て之に優れる大慈善業の決して觀るべからざる事を、要するに此事たる社會の事業也、否國家の事業也、否世界の事業也、日本女子の義膽俠骨を此間に揮ふ、亦以て醉生夢死の鬚眉男子を慴伏せしむるに足らんか、故に吾人は國家の爲め該保護會の速に設立せられん事を翹望せざるを得ず。

女德のしをり（三）

三輪田眞佐子

以上は男女に共通なる天性なれども、更に、男子と女子と差別して考ふれば、大に趣を異にするふし多かるべし。總て、人の身體は細胞の集にして、男女は、原生細胞の性質を異にするとかや。乃ち、男性は發動的なれども、女性は受動的なり。そは生物學を見れば明ならん。されど、胎内にあるころより、男兒と女兒とは體制を別にするあり、既に生るゝを見れば、男女の身體の相違は、說明を待たで知り得べし。わきて女子の乳房は、著しく發育するなどは母たる身分の定まる天性にして、男子に普通なる鬚髯の、女子になきなどは、その天性、男子よりも纖弱なる證表と見るも可ならん。

さて、身體の相違は、おのづから、生活に對する職分の相違を生ずるものなれど、これを根底と定めて、男女の分限を盡すこそ人の道なれ。且、身體の相異なる如く、心象も相同じからざるは自然の理なり。由りて、女子は、男子よりも格別なる教訓あるべきなり。

中庸に、天命之謂レ性、率レ性之謂レ道、修レ道之謂レ教。とあり。朱子曰、道之得二於身一者謂二之德一。と、まことや、人の道德を修むるは、その天性の善をも琢磨する意にして、女德とは、女子の道を身に得るに外ならず。思ふに、花の眞はその香にあり、食の美はその味にある如く、女子の實は女德にあるべし。若、女德の具はらざる女子あらば、(まことかと聞きて見つれどことの葉を飾れる玉の枝にぞありける)と捨てられし花あるは、譬如二畫地爲一レ餠不レ可レ啖也。と言はれし食のごとく、形のみにて實なき女子と言ふべし。あはれ。

女德は、これあれば完全なる女子となり。これなければ、肉體のみの女子となるを以て、女子の固有に踏むべき道なれば、如何なる困難に逢はんも、必ず破るべからず、況して女德を行ふ女子は、幸福を得べければ、これを守らざるものは愚の至りにこそ。

積善の家に餘慶あり、積惡の家に餘殃あり。とかや。實にさるものぞかし。凡そ原因

と結果の相伴ふは、萬有に貫通する眞理なれど、人も、必ず、その行の善惡に由りて、報にも禍福あるべし。されど、女德の具はる女子の身は、高嶺の雪の純潔なるが如く、露ばかりも外塵に穢さるゝ患なく、心は、いつもながら、のどかなる霞をわけて春の野に遊ぶやう樂しからんを以て、人の知らざる無限の幸福を享くべし。仁者壽とは宜かな哉。

河は九里を潤すとかや、盛德の心に滿つるものは、おのづから樂しき家庭を作り、人生の最大幸福を得るに至るべし。施いてその德風を以てなびかさんには、一國を感化せんも難からず。されど、幼者はこれに懷き、老者はこれを歡び、あるは敬するものもあり、慕ふものもありて、遂には人生の目的を達するならんか。あはれ、そのゆかしさ、たとへんかたぞなき。

或人曰く、富をなせど仁ならず、仁をなせど富まず。されど今の世に富なくど幸福を得んこと難し。と、おのれ思ふに、幸福は富にあらずして心にあり。故に、高閣壯館にすむ人も、德なきものは單に肉體の欲を恣にするを得るのみ。などか、一簞の食一瓢の飮も、樂その中にありといふ眞味を知り得ん。しかのみならず、仁をなせど富まずとは、邪なる財を得ざる意にて、勤勉節儉などの德を行ふ以上は、決して貧しきに陷

らざるべし。世人は、仁をなすものは愚者のごとく思ふならんも、賢者ならずど、必ず眞の仁をなす能はざるものぞかし。



高臺湖月院

鹽井福子

我國にて、貴婦人として恥がしからぬ人を求むれど、十指まづ高臺湖月院に屈すべし高臺湖月院とは、豐太閤が夫人の寡居の名にして、夫人は、先きに、女鑑にのりしかど、今またものすべきにあらねど、先きにはたゞその婚儀の始めをのみ記されて、夫人が秀吉を助けて、裨益せし事多き後を記されず、夫人のためにいと惜しく思ふまゝに、嗚呼のわざなれど、此處にそをのみ補はんと思ふに、その始めを云はぬも、腹ふくるゝやうに覺ゆれど、此處にまたくりかへし、始終をものし侍るなり。

我が國の歴史に於て、唯一の偉人と評されたる太閤秀吉に配するに足る夫人と云へど、

其人となりは已にれしはかられぬべし。彼の淀君などとは雲泥の差あり。夫人、母は尾張の國朝日村の人なりしよし、或は尾張津島の人、藤井又左衛門の女にて、八重子と呼びしとも、諸説紛々として一ならず。父は氏名詳ならず、或は中村の人杉原七郎左衛門と呼び、秀吉諸侯となるに及び、その父杉原伯耆と稱して老臣たりしと云ふ説あり。

夫人、幼かりし時の名を彌々と呼び、妹と共に淺野長勝の家に養はれけるが、折りふし、前田犬千代と呼びし若者、自來、淺野氏と中よかりけるが、此姉妹を見、其長女、即ち彌々、女をいとめでたく思ひ、やがて、そを娶らん事を淺野氏にはかりけるに、長勝はもとより異議なく、よろこびて之に與へんとするに、彌々子何思ひけん、承けひかざりけり。當時犬千代と云へるは、清洲城中、文あり、武あり、容貌もまたすぐれ、しかも信長公の寵愛も萬人に拔んでたる少年、拒むはいぶかし、こは娘心、耻かしうてならんと思ひ、兎角そゝのかせど、彌々女はあくまでも辭みけるさま、信に心より拒むと見ゑけるに、淺野氏は思ひがけず、且つ一旦約したる事、前田氏へ何とことわらん。よき友垣、之より隔たりてはなど、うち案じ、うち困じて、こを木下藤吉郎に語らひけるに、藤吉は小首をだも傾けず、そはいと安き事なり、己れに任せ給へ、容易

う破談仕るべしといふに、淺野氏はなほきづかへど、日來才ある藤吉、またよき術もあるにやと思ひ、藤吉郎が言の葉のまに〳〵に任せけり。

木下、もと前田とよき友なり、速かに行きて、犬千代に語るやう、君が得まくと思ふよしなる淺野氏の女は、已れととく結びしことあれど、君が請ひに從ふこと固かり、君、彼を捨て給へと云ふ、藤吉郎は乃ち秀吉の初めの名にして、その頃は未だ輕き身分にて、祿も少く、殊に容貌も醜く、面つきより才の敏きさま、よく猿に通ひたりとて、人みな猿と字して氏名を云ふものなきまでおとしめらるゝ身なれど、犬千代思ふやう彼れ必ず此の緣を絕んとてのたばかり言ならん、己れをも知らぬ過分の言の葉かな、よし〳〵その儀ならば我に策あり、猿面の赤き皮ひむきくれんものと、犬千代も流石才子、わざとうち笑うて、そは近來いとめづらしきことかな、さりとも知らず思ひをかけし我がおろかさ、されど、君、何を今迄はたゆたひ給ひける、早う婚儀をとゝのへ給へ、我れ、今、君がために媒ち仕るべしとあるに、藤吉郎も流石うち困じ、そはありがたき言なれど、あまりに貧しければ、今少し待たんなど辭まんとするに、それ、たばかりならん、おのれいかでか逃がすべきと犬千代は心に思ひ笑ひつゝ、否々、君が貧しきは兼ねて人も知る所なり、何を、さやうの事にて辭まん事やはある、とく婚儀

とゝのへ給へ、我れこそ結ぶの神に代り申すべけれど、いよ〳〵強ふるに、流石に猿面も重ねて辭まん才も出です、さはとて、そはたむかり言なりと云はんも口惜しく、如何はせんと苦しき心、色にはわらはさず、遂に大膽にも柴田勝家によりて婚儀を排へん事を信長に請ひ、犬千代の媒を以て彌々女を娶らんとしたり。淺野氏はかくと聞くや、又大におどろき、犬千代をさへ辭みたるに、如何で猿面に從ふべき、如何はすべきと思案もはてなく、此事を彌々女に語りしに、彌々女は中〳〵に辭まず、從ひまゐらすべしとあるに、淺野は思ひがけず、心おちゐると共に、又あやしみつゝも、婚儀やう〳〵とゝのひたり。折りしも藤吉が貧しさは世のつねならず、ろの婚禮の夕べ、夫妻、藁を簀に布きて坐し、缺げたる徳利、破れたる盃をもて相汲みたり。

我が強ひ言にせんすべなくとゝのひたる婚儀、さむかり樂しからぬ妻女が色を見んものとて、數日の後、前田、木下方へおとづれしに、彌々女はやゝたすきをとり、厨口より出で、犬千代を迎へ、ねんごろに媒の勞を謝して、不快の色は更になく、殊におろそかならず藤吉郎にかしづくさまを見て、前田は案に相違し、そゞろ藤吉が人となりに感じて、遂に斷金の交はりを結びたり。之もまた世の常ならぬ大丈夫にてこそありけれ。これ實に前田利家にて、秀吉が幕下に、家康と肩を並べし豪傑なり。さるに、な

は此人よりも、秀吉をと見拔きたる眼識、また非凡ならずや。

彌々女、誠に世のつねならぬ賢女、よく夫にかしづきて、かりにも侮り輕しめず、藤吉、後豐臣の姓を賜はりて、天下を掌握するに及び、夫人もまた北の政所と稱へられて、いよ〳〵秀吉を助けゝり、秀吉、後やゝ奢りに長ぜんとするを見て、願くは良人、藁席瓦缸の時を忘れ玉はるなと常に諫め、已れも質素を守りけりとぞ。

また秀吉いたく舞を好みて、樂師と共にわけくれ、舞ひすさみける頃、夫人もまた冠りをかうむり、笏をとりて、共に〳〵舞ひたはひて、うちよろこび、朝に婢女が事を申すも知らぬげ、四更にまた婢女が事とふも聞かぬげ、婢女はうち困じ、またやとひ、またや來り、何事か用事を告げんとするも、夫人は敢て省ず、終日まひまふ袖、ふりすさびけり。秀吉之を見、げにかゝる遊びにふけりては、世の大事も聞かざるべしと思ひさとり、遂に舞ひまふ袖をたちしとなり。これ夫人が夫を諫めんために、わざとはかりし事にて、この一事にても、萬事を推しはかられつべし。秀吉薨ずるに及び、薙髮して寡居し、高臺湖月院と稱しけり。

後、家康京師にありて、秀頼を招きけるに、秀頼の生母淀君、變あるを疑ひて、遣らじとかまへしを、湖月院、すゝめて之をやり玉ひ、其折り加藤清正、朝野幸長をして、

弓銃を擁して、固く秀頼を護らせけるに、家康害する事能はず、恙なく歸りたり。之れ康家を恐れざるの威を知らしめしにて、清正、幸長の如き股肱の臣をして守護せしめし度量、才智、また以て推しはからるべし。あはれ、秀吉公が閨閤の中、この賢夫人のみにして、淀君なからましせば、豊臣氏は必ずしも二世にして亡びざらましを。夫人、寛永元年九月十六日、果敢なき露と消え失せ給ひぬ。

衣縫金繼の女

山本正周

今はむかし、右京の人、衣縫の金繼といふもの〻女になにがしといへるありて、父母と共に、河内國志紀郡の或る村に住ひけるが、女十二歳の時、父身亡せければ、女は、母にもまさりて力を落し、天に慟き地に哭すといへども、すぎにし人のかへるべきにも非ず、今は詮なしとて、母と共に、泣く／＼野邊の送りを濟しけり。斯くて、淋しき月日を送りける程に、母は其の子のいとしくて、しかるべき家に嫁がせんとて、既に約束をもなしけるに、女は、父の失せ給ひて未だ幾程も經ざる上に、母を養ふ人のなければ、獨り我が身の安逸を求むべきに非ずとて、母の言葉に從はず、後には、竊かに家を出で〻、父の墓のほとりに赴き、香花を手向けなどして傍を去らず。母も、遂

に、其の志の動かすべからざるを知りて、復た言はざりしといふ。是より後、女は、もぱら父の冥福を祈り、其の忌日には、必ず懇ろに供養をなし。又母に事へては孝養を盡し、我が身のことは忘れたらんが如し。又此の村の恵賀河といへるは、冬日には、水嵩増して渉るべからず、不便限りなければ、女は、いかで此に橋を造りて往來の便利にせむやと思ひ立ち、母にもかたらひて財を積むこと十五年の久しきに及び、遂に其の望を達しけり。かくて、母が齢八十二にて死せしまで、女は他事なく之に事へければ、其の奇特なる行の數々官に聞え、遂に爵三級を賜はり、田租を免るされ、門閭に旌表せらるゝの榮を受けたりといふ。孝の道や大なりと謂ふべし。

父母が　頭かきなで　幸くあれさ　云ひし言葉ぞ　忘れかねつる　（丈部稻麿）

限りあれば　今日ぬぎすてつ　ふぢごろも　果なきものは　涙なりけり　（藤原道信朝臣）

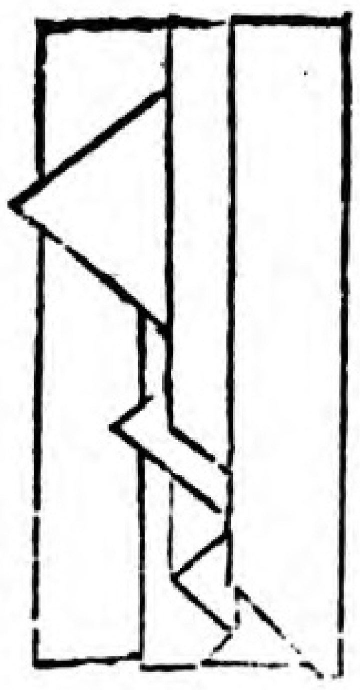


家政

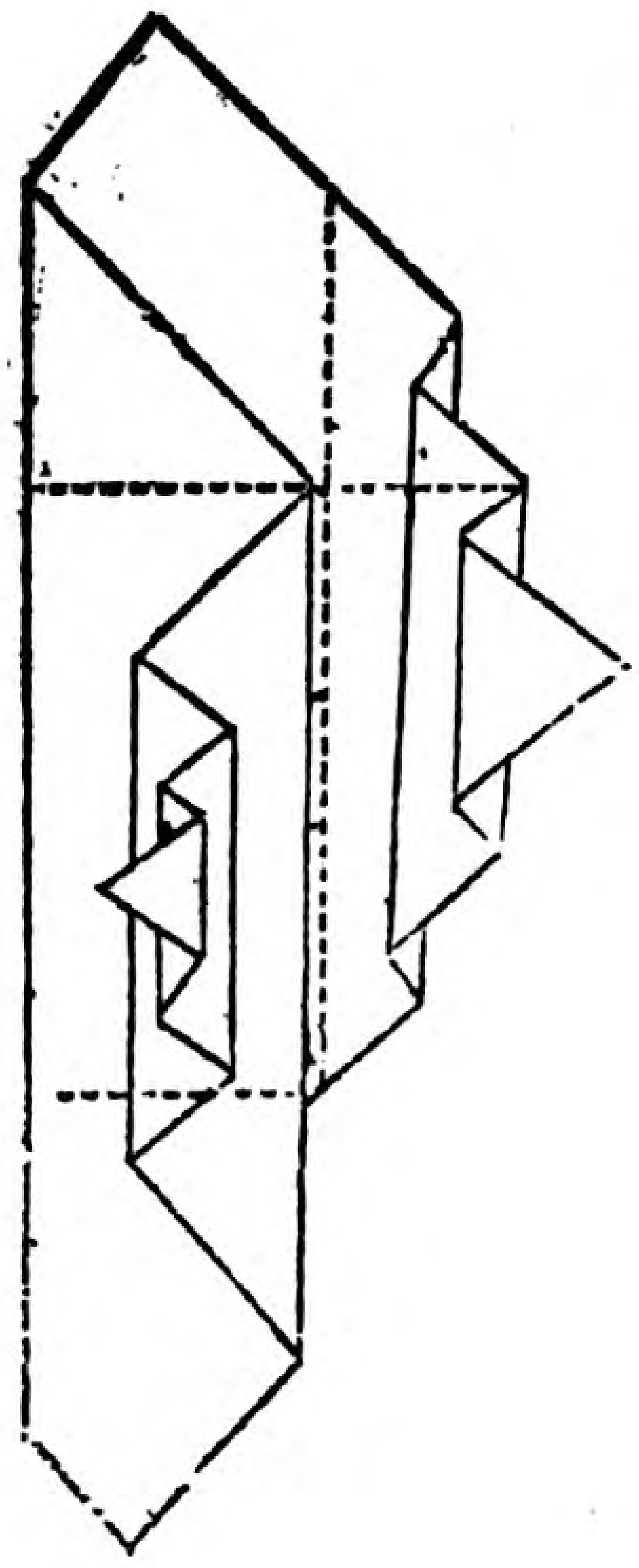
折形

有住齊

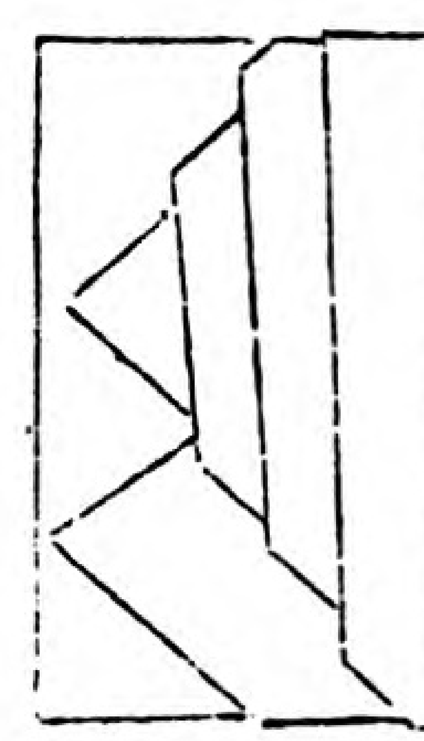
眉拂。眞立。袖形。包。



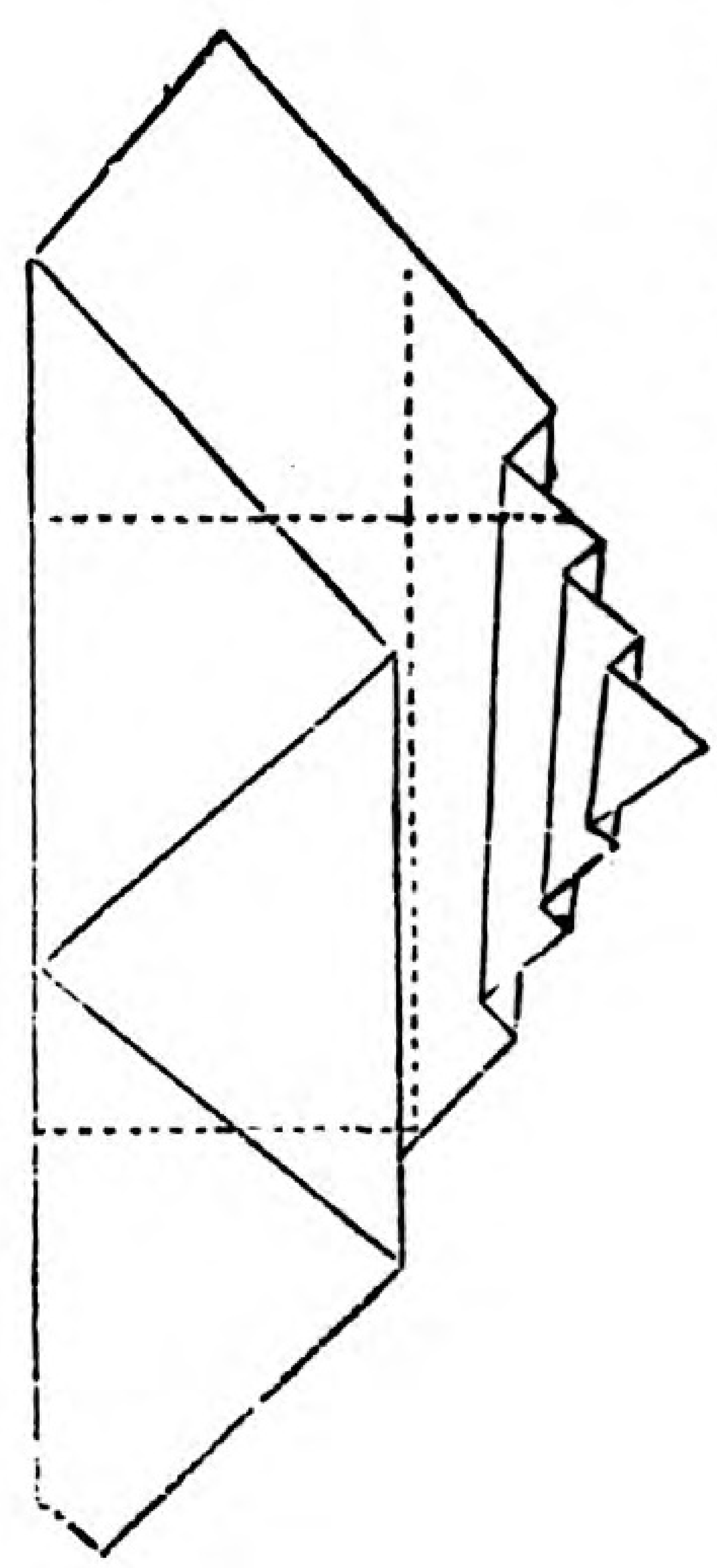
れなじく解きたる所



櫛ばさみ包



れなじく解きたる所



茶の湯

茶道客方心得草（續）

孤峯庵碌仙齋不羨

閱　葦雄

又相客等有之時は、謙遜辭讓して着座すべし。（但客

互の讓り合は三度に過べからず、三度以上は反て無禮になるなり）老錬家、又は巧者の人、或は身分のある人の上に着座すべからず。賓客各々座定て後、煙草盆、火鉢、香煎湯にても出すべし。又茶菓の類豫て配置し置ば妨なし。次に、亭主は、爐中の火相の強弱見斗、炭なする事有べし。此時は、炭手前の條に謂たる如く、（本誌第百四拾五、六號に詳し）炭斗を運び、定座に置付、立て勝手へ入、灰焙烙を持、爐前に座し、方六を右手にて定座に置付、而後能身體を調へ、爐の正中に座すべし。（但是を茶言葉に、居前を直すと言）亭主炭斗の器具置合、釜を上げたらむ、客方は、能釜の姿、形容の大小、鑄作の新古、何人の好誰の作と云事を見定むべし。不明瞭なる時は、亭主に尋問すべし。亭主羽箒を取、總掃をなす時、客方一同、互に禮して爐邊へ寄、爐中を拜見すべし。（四疊半以下小間は摺寄るべし。八疊敷に着居たらむ立て進むべし）前に手を突き。前炭の流れたるを、爐中五德の据方、並に作灰の作方、爐中は故人の説に人の胸中の如しと垂訓せられたり五德の爪は清淨を選す、灰の隅の切形、灰の入加減高下程度に注意し、灰は五德の爪、鑄鐵の爐迄をよしとす、又炭の中、主客互に閑話有之不苦、灰を蒔時は灰の良非、濕り加減、灰方六の作柄迄尋問べし、炭の仕方をも能々見るべし。枝炭を入、點炭を施したらむ、客方は相當に挨拶有べし。後總掃の羽箒にて衆客元席へ退くべし。亭主香を焚む、蓋をする時、上客香合を拜見すべし、亭主は好まれたらむ輕く受て、爐縁の向の角、炭取の先の處へ、香合の向を振替て後出すべし、順序炭手前相濟、灰炮錄を右手にて取持、左手を添て持入べし。是を見て

敷居を離れたらば、上客香合を我前に引寄べし。炭斗を引入りたらば、上客次客へ挨拶して香合を拜見すべし、先雙手を突て香合全體の形容を見、後に手に取、左の掌中に置て、蓋を右手にて取、下に置、實の方を見、盆付を見るには右の手を香合の實の方へ當て打反し見るべし。又香の匂ひは鼻にてきくべし、十分に見て蓋をなし、下に置、雙手を突て一篇見て、次客へ送るべし、送る度合は、我が身と次客との間、疊の縁より向へ送るべし。相客幾人有ても、見て廻す事同じ、次に末座見終り持て立、鍵疊爐を僅少離れて座し、一旦我前に置付、上客に向ひ、手近より返すべし。抔と斷り言て返す。箇所は爐は釜の環付の通り、爐縁より香合一箇丈け明けて返す、又上客へ持行、上客より返すことも有べし。香合返りたらば、亭主再出、釜の蓋の切掛後に一膝横に膝行して、禮客の挨拶を受て持立べし此時、上客より、香合の品柄鑑定の上、主方へ申述ふべし。若、鑑定立たざれは、主人へ委細に質問すべし。知らざるとて恥辱には有らざるなり。次に、主方は、炭の移り方次第茶を點ぜんとならば菓子を出すべし。右出たらば。上客は次禮の上、菓子を取廻すべし。(但干菓子ならば懷中の紙を出し我膝の前に置、見計ひ、上より順能取べし。盛方を崩すべからず)又蒸菓子ならば懷中の紙を出し、附有箸にて取べし。(但、干菓子蒸菓子共に、菓子入に蓋あらば、蓋は取て側に置くべし。蓋の置方は、見返しに蒔繪抔有之ば、裏返して置べし、無地物なれば、其儘置と心得べし)又次客へ送るにも、蓋ある者を銘々に明締も煩はしければ、臨期の場合には、明たる儘廻し、蓋はふたの儘送るも無妨。次に菓

子末座に廻り、末座取たらむ、蓋をして向を直し、上客の前へ持往べし。

（以下次號）

女禮

禮節教授　有住常子

琴差上る樣

まづ、彈たまふ樣に、右手にて眞中を下より抱ゐ、左手にて龍舌の所、（琴の下の木口龍舌の如き形ある所なり）を持出で、御前に參り、立とゞまり、左足を、右足より半足ひきて、跪つきて、下にゐき、足の所を少し進めてまゐらすべし。

爪は懷中して出で、少し右の方に向ひて取出し、御右の方にまゐらすべし。いと貴き御前の爪は、別にだいにすゑて、持出るをよしとすなり。

琴差上てさがる樣

まゐらせをへて、左右の手を、膝前にひきて、右手を右膝頭につけて、引てつまだち、左手を、左膝頭につけて、引てつまだちて、右膝頭をすこしうかして、右に膝をひねりて、ますぐにたちあがりて、右足を一足あとへ引き、次に左足を一足ひきて、次に右足を引きて、左足のあとに横樣につけて、次に左足を、右足のさまに、竪樣につけて、右にめぐりて、左足よりすゝみて退きかへるべし。

琵琶差上る樣

こは撥を、撥面にさして、左の手にて琵琶首を持ち右の手にて撥面を下より抱ゐ、みづかつ彈樣にもち出で、御前に至りて、立とゞまり、左足を、右足より半足あとに引て、跪き下に立てゝ取直し、御彈

なさるゝ様になしてまゐらすべし。

琵琶持出て退く様

ことにおなしけれどかゝずかし。

碁盤など差上る様

碁笥を盤の上におき並べて。兩人にて持出で。そのまゝ、御前に跪きて、左の方にある者、正面に向ひ、少し進めてまゐらすべし。石は白きを、上位の人にまゐらすべし。又べつに、上位の人の石をだいにすゑても差上べし。何れも、石は、御右の方へ持まゐるなり。

碁盤まゐらせて退く様

右は右に、左は左に、上座をうけて、三足にてめぐりて、共にたちかへるべし。上座をうくるとは、右は右に、左は左にめぐる事をいふなり。

將棊盤差上る様

駒の箱を、盤の上におきて、右の手にて木口を持ち、左手を盤の下に入れて、持て出で、左足をあとへ半足引て、跪ぎ、すわりながら、下におきて、少すゝめてまゐらすべし。大なる時は、兩人しても、持出るなり。駒をたてゝ、まゐらするには、點なき王將を、上位の御前にまゐらする事としるべし。

將棊盤まゐらせて退く様

これはかはることもなし。

たちぬひ

西山たい子

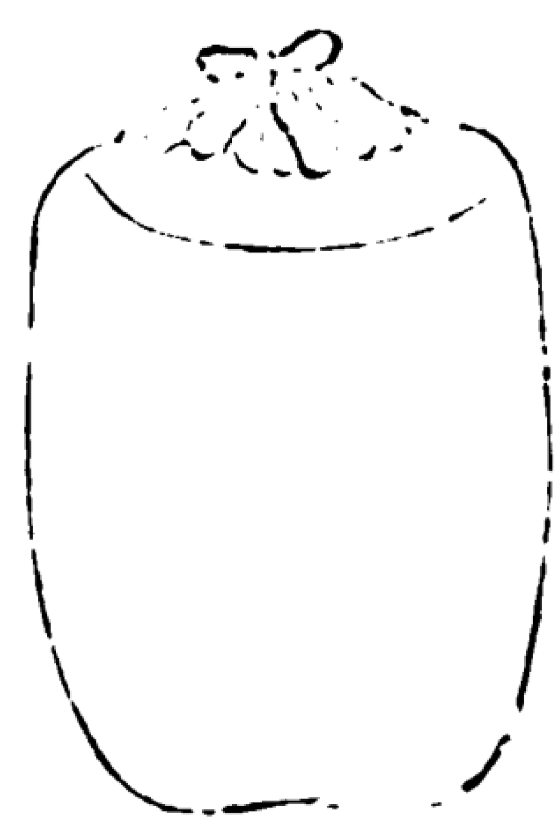
（八十七）辨當袋

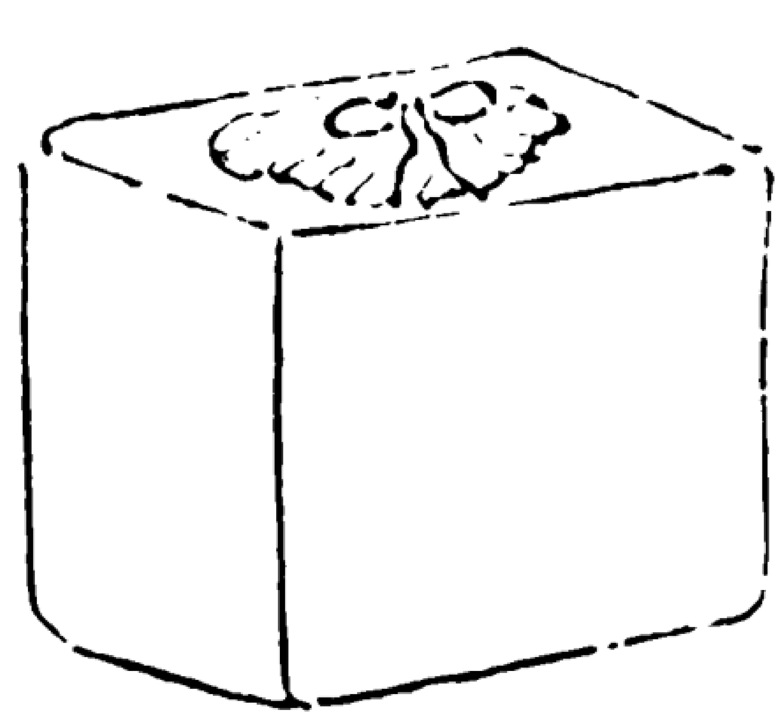
辨當はふろしきに包むもよろしけれど、幼き兒たちは、結びめおしう、ゆきゝの途にて、解けおつるな

どの面倒あり。袋となさんには、さやうなる面倒なく、殊に雨ふり、雪ふりの折りなどは、腰にさげんにも容易くて、使りいとよろしきものなり。

まづ、四角なるものにても、丸きものにても、辨當の高さと、其周圍とをはかりて、其大きさより、少しゆるめに切を切り、それを側となし。またその底をはかりて、丸きものは丸く、角なるものは角に裁つべし。但し裏表とも同じに裁つべし。

さて、其側に切りたる切をとりて、表を二つに折り、裏も二つに折り合せて、横を四つぬひになし、引きかへせば、ぬひめ中に入りて、袷の袖の如くになるなり。その縫ひたる周圍の切に、底の切をはむるやうになし、そのめぐりを裏よりぬふべし。かくて袋の形になりたる物の口に、巾一寸か一寸五分をかりの切を周圍の切と同じ長さに切り、表側にくるりとぬひつけ、紐を入れて、裏側にて絎けるべし。







造花

伏見藤三郎

筍

筍は、羽二重、寒冷紗、又は美濃紙にて造る。(布は、絹、木綿共に濃く糊を引く、先づ、太き線鐵に、綿を筍の形に着けて、糊にて固めたる、後皮を造るべし。さて、筍の最も上部に在る皮は、用ゐる處の布又は紙にて、實物を見合して其形に五六枚斷ち、之を「オウラミン」と「青竹」とにて染め、之をさきに綿にて固めたる頭に着けて、夫より、小さき皮より漸次大なる皮を根本まで着くべし。此の皮は、實物に參酌して大小各種の形に、普通の筍の皮狀にたち、之を「オウラミン」にて全体を薄黄色に染め、其上を茶粉を薄く溶きて染め、後其のなま乾きのとき、茶粉と墨とを混ぜ合せたる液を筆の先につけて斑點を施し、乾して後、裏より菊鏝にて、可成細かく縱に筋を入れ、實物の通りに着け、根元の白く造る處は、胡粉に膠を入れて水にて溶きたるものにて模糊し、尙、皮に斑點を施したる繪の具にて、根の黑き點を施すべし。

第百二十五圖



だいどころ

一はな鰈

此魚は、九月より、翌年の四月までを期節とす。茶椀種、鹽燒、てり燒、刺身、其他用ひ方赤鯛と變る事なし。

一石鰈

いしがれひは、三月より、九月迄を期節とし、鹽燒、煮肴、けんちんむし、又西洋料理にては、フライに、用ふるなり。

一ほし鰈

はしかれひは、春の中を期節とす。料理方は、前の石鰈と變る事なし。

一むし鰈

むしかれひは、十二月より、三月迄を期節とす。鹽蒸、鹽燒、又、薄鹽になす、日ばしにしたるもの尤美味なり。

一めいた鰈

めいたがれひは、五月より、十月迄を期節とす。鹽燒、煮肴、又だるま鰈、かんぞ鰈、抔われ共、料理法は前に同じ。

一松川鰈

松川鰈の期節は、五月より、七月迄とす。料理方、鹽燒、煮肴。

おたびらめ

是は、夏中を期節とし、煮肴に用ふ。

一ぶり

ぶりは、十二月より、翌年の三月迄を期節とす。てり燒、味噌漬、刺身、等に用ふ。

一むつ

むつの期節は、十二月より、翌年の三月迄とす。煮肴、鹽燒、さしみ、味噌漬、等に用ふ。むつは、子を賞味するものなり。甘煮にしてよろし。



學園

秀歌集（十九）

鹽井正男

○

忍ぶれど色に出にけり我が戀は
　　物や思ふと人の問ふまで

○これは、拾遺集の十一の卷にありて、平兼盛が歌なり。○忍ぶれど。俗に隱せどもといふ如きことにて、我が人を戀ふ心を、それとうち出でず、ひつと隱したるなり。○色に出にけり。我が氣色にあらはるゝことなり。即ち、我が戀ひ慕ふ心は、云ひ出でず深く隱くせど、戀ふ心强き故に、自ら我が氣色にあらはれて見ゆるといふことなり。○ものや思ふと。ものを思うてかと問ふ文にて、即ち、何か思ひ憂ひて居るにかと、他人にあやしみ問はるゝとなり。

○一首の意は、我が戀ひ慕ふ心は、言葉にはいひ出でず深く隱して居れど、慕ふ心强き故に　自ら我が氣色にあらはれ、他人が我れを見て、この頃は大層うき立たぬ樣子なるが、何か思ひ憂ひて居るにかとあやしみ問ふまでに、甚しく我が氣色にあらはれて見ゆるほどであるワイといふ意にて、忍びてやる方なき戀ひの心の自ら氣色にあらはる

ゝ意なり。この歌は、三一四五二といふやうに句を順序してみるべし。

兼盛が此の歌をよみたるは、彼の有名なる　村上天皇の天德の歌合せの節のことにて、其の時、兼盛の此の歌に合せたるは。壬生忠見がよめる「戀しすてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひ初めしか」といふ歌なり。兩首共に優れたりとて評者も點を定めかねてためらひたるに、主上が兼盛の歌の方を二度までよみかへされしかば、此の方に御心かゝれるにこそとて、兼盛の方勝ちと定まりぬ。忠見は、それをなげき〳〵て終にはかなくなれりとて、有名なる事なり。誠に忠見の方も上手に面白はあれど、兼盛の方情切に感深く、自ら身にしみてればゆるけしき深し。そのけぢめをよく見られよ。

○

いかにしてしばし忘れむ命だに
　あらば逢瀬の有りもこそすれ

○この歌も全集全卷にありて、讀人は知れず。○いかにして。いかにかして即ちどうかしてといふ如き意なり。○しばし忘れむ。暫時人の戀ひしさを忘れむといふことなり。かく常に人を思ひ人を戀ひて居ては、我が身は、戀ひゆゑに、つひに死ぬ故にといふ言葉を、一句の上に添へて見るべし。○命だにあらば、他の事はとにかく、我が命だけがあらばといふことなり。○逢ふせ。戀ひしき人にあはむ時なり。○一首の意は、かく人を思ひ戀れてのみあらば、つひに我が身は戀ひ故に死なむ、されば、いかにもして暫時人の戀ひしさを忘れむ、我が命だけがあらば、また戀ひしき人にあふ時も

あるハイといふことなり。歌がらは、さまでにはあらねど、情切なる故によしとすべし。

○逢ひ見ての後の心にくらぶれば
　昔は物を思はざりけり

○これも全葉十二の卷にありて、敦忠朝臣のよめるなり。○逢ひ見て。我が望みかなひて、戀ひ慕ひたる人にあひたるなり。○昔は。まだ逢はざりし時をいふなり。

○一首の意は、未だ逢はざりし時も、戀ひしさ懷かしさに、隨分と深くもの思ひをして、其の時は、實に限りなきもの思ひすることよと思うて居たりしが、かく逢ひたる後の今日は、一層其の人に逢ひたくも成り、また、此の後見捨てらるゝやうの事はなからむか、若し見捨てられなむいかにせむなどと、一層いろ／＼と餘計にものが思はれて、逢ふを得ざりし時と、かく逢ひたる後とを比較すれば、反て、逢ふを得ざりし昔の方が、ものは思はなかつた。といふことにて、逢ひたるより一層深く戀ひしく、もの思はるゝをいふなり。誠に人情のまことをいひ盡くして、心あはれに、しかも調もやさしくめでたく、限りなくあはれなる歌なり。

○露にだにあてじと思ひし人しもぞ
　時雨ふるころ旅に行きける

○これは、全集六の卷にあり。壬生忠見が十月ばかりに、ものへまかりける人に、よみて送れる歌なり。○露にだに。俗にいふ露にでもといふやうなる意なり。○人しもぞ。人がマアーといふ如き意にて、しもは、しは語勢を強める助詞にて、も

は感動をあらはせる感動詞なり。

○一首の意は、露にでもあてまいと思ひたる人が、マァー露どころではない、時雨の降る時分に、旅びに出で行かれた、誠にあんじられるといふ事にて、我がかなしき人の空さう〴〵しくおぼつかなき頃旅びに出で行けるを思ひあんじてよみやれるなり。歌はさぞかりにあらねど、やさしく切なる情こもりてあはれなり。

○

思ふ事有りとはなしに久方の
　　月夜となれどねられざりけり

○これは、全集八の巻にありて、貫之朝臣が、清愼公の家の屛風にかきつけたる歌なり。○思ふ事ありとはなしに。思ふ事のありといふにはあらずしてといふことなり。○久方の。月の枕詞に置きたるなり。ひさかたとは瓠の形といふことにて、天はうつろ形にて瓠に似たれど、さて、ひさかたといひて、天の枕詞に置き初めたるなり。それより、天なる事物の枕詞にも用ふるやうなれるなり。久方と書くは天は長久なるものなれど久方の天といひなせるなりといふ說によれるなれど。瓠形の方よろしからむ。

○一首の意は、殊更に思ふ事あるといふわけにはあらずして、唯何となう、月夜となれど、ねられぬヮイとながめたるにて、意は明かなり。何となう月の身にしみていねがてにせらるゝけしき、誠に限りなき心こもりて面白くもあはれなり。

下田義天類ぬしいたづきに罹りて床に伏せれど、此度は筆とらるゝことかなはず。稍快きに向へど、次號より源氏物語の講義をものせらるべし。



眞龍院君御道の記（つゞき）

金子みとり寄贈

十三日　晴、卯の半過る頃打立むとろゝのかされて出るに、山の端ごとにまだゆきまで朝日輝きて、一際なれど、

きのふ見し飯縄戸隱黒姫の
　山に朝けの影にほふらん

野尻の驛の木々のひまより湖水を見て、

木の間よりほの見え初めて秋風に
　よする野尻の水のさゝなみ

おなじ驛の宿りに休らひ、窓の外に立出れど、

水海やうつす朝日はます鏡
　ひかりを寄するなみの中島

信濃越後の境なる關川を打渡るとて、

秋風の聲も通ひて名に高く
　みなぎり落る關川の水

同じく關をこゆるとて、

豐けしな戸さゝぬ御代のしるしとて
　安く越行關川の關

此驛に中休らひしつゝ、氣はひ坂、小田切などいふを越るとて、

谷川の音さへすごき岨つたひ
　こゝぞ田切とたどる行末

二俣村に休らひて、大田切をも打こえて、

うれしくも越て來にけり岩手ふみ
　かさなる山の旅の衣手

關山に休らひ、幾里々を過ぎて一つ屋村のほとり海上の眺望類なし。

　山越のうさもわすれてやゝ來なし
　　遥にむかふ越のしらなみ

二本木など言ふにも來だし休らひて、猶行まゝに、杣人の家居立つゝぐを見て、

　かりそめの浮世と思へどなれし増る
　　賤がふせやはさすが侘しき

柴負つれて、山かげに寄添ふもいとあはれに思はれて、

　山人の朝な夕なにやすけなき
　　わざを木こりの世渡にして

申の半に荒井の驛に着ぬ。

　はる／＼と谷峯こえてけふこゝに
　　こゝろわらゐの宿のたき浪

宿の庭面せ詠ことなれど、とり／＼に腰折詠しつゝ、輿に乘じて旅のやつれも打わすれ侍りぬ。

十四日　晴　辰の皷過る頃宿を出で分行、野邊の朝氣の詠め珍らかに、わきて中村などいふほとりいとこそなり。

　秋ふかく色付き渡る千町田の
　　稲葉に通ふ風ぞ豐けき

今泉川を渡るとて、

　秋にすむ水さへ淸き泉川
　　あやふみながら渡るいたはし

高田に暫し休らふ。城下男々數見ゆる。猶村々をたどり／＼行に、小棟村のほとり野田の眺望美景なり。

　森つゞき遠山かつらかけてげに
　　詠盡させぬあきの千町田

秋田かる頃にも成りぬ賤の男が

いそぐ仕業の果しなの世や

五智にて中休らひしつゝ如來堂に詣てゝ、

ゐにしありて實にもたふとき御佛の
れましを近く仰ぐかしこさ

名に高き五の智恵をたもちつゝ
佛々と誓ひたのまむ

如來は運慶の作にて、丈餘の坐像五体安置し給ふ、殊勝の靈佛なり。爰より行道に薄一叢生たる所にて、

旅人をまねぐためとや花薄
たか山かげに袖〇〇〇〇〇

かくれもひつゞけ、少し行ど、いつしか海邊にいたりぬ。左は峨々たる屛巒複ひ、右は赤岩、唐戸岩、波打際の通ひ詠なれど、心も空に思はゆれど、秋の日の影まどゆきまで晴渡り、波いと靜にて、浦々見ゆる珍らかなれど、

打むかふ心も晴て越の海や
見るめ果なき八重のうらなみ

長濱といふ所にて、

眞砂地に寄ではかへるしら波の
見るめもいとゞ長濱のうら

沖ゆく船を見て、

海原や見るめくもらぬ夕なぎに
眞帆かけて行く沖の友ふね

發二五智一至二名立驛一路次之吟

仰望屛々絶壁嶺　低頭初見浪濤連
旅行幾日山郵路　漸過又通北海邊

見るめ數そふ磯邊つたひ、有馬川にいたりぬ。橋打渡り、しどし休らひ行まゝに、浦々に漁夫の家居軒を並べ數多あり。又、吉原青木坂などいふけはしき道をたどり〳〵て、實に海濱の見るめ珍らか成るに、

あら磯波の打寄するもめなれねど、たどろ〳〵しく、かつうはけふの山越心細くたゆひて、

海山を幾重越てもはてしなき
けふ秋旅のうきを忘りけり

日も西にかたぶくまゝに、

旅衣夕になれどいとゞ猶
なれしわつまのことぞこひしき

暮過る頃名立の驛の名立寺に宿りを求む、折しも十四日の月隈なきを見て、

最中なる空待夜よりさやけさの
影を名立の浪の上の月

海いと近ければ、波の音枕にひゞきて寢られぬまゝに、

浪の聲松のあらしの音そへて
旅寐の枕夢も見つかず

十五日　辰の皷過しと立出る、空いとよく霽渡れど、海上の見渡ことなり、名立川を打渡り、浦々磯邊を見て、

みるめさへなぎたる朝の浦の波
遠近かけてむかふ隈なき

名たゝる岩によせかへる波も一際なれど、

花とちり玉とくだけて打寄する
あら磯岩の波の隙かな

遠崎に暫し休らひて猶海邊を行に、沖を隔て佐渡の國見ゆ、

寫し繪もさらに及ばじ沖の浪
かけてそらかふ浦の浮島

沖の石に鷗の居る所を、

波かけてかはくまもなき沖の石に
なるゝ鷗のとひ違ふかな

能生にて晝のかれ飯たうへつゝ、猶行末も海邊なれど、心細く、名さへ鬼伏といふ所と聞ておそろしさに、

磯の波かゝる巖の音たかみ
　千々にこゝろをくだく海原

早川板橋かゝる、石高うして瀬早く見ゆ、

橋柱あやふきながらかけ渡す
　名も早川の水のしらなみ

鍛治屋敷に休らひ、猶出行しに、海士の家立つゞくもいぶせけれど、さま變りて興あるさまにおもひ侍りて、

鹽燒のけぶりやいつく笘やかた
　見るめかるてふ海士の衣手

賤しき海士人も、鹽燒の業さへ打すてゝ、旅の粧ひ見んとて打つどふもをかし。

藻鹽やく烟もけふは立やらで
　人を見るめのあまのおとめ子

などおもひつゞけてたどり行に、大和川にいたりぬ。榊原殿よりもてなしに、船橋かけ渡して、武士どもおごそかに立ちつどへり。

かず〳〵の石に障りて浪高き
　大和川原を渡る舟はし

爰かしこからうじて打渡りつゝ、漸く暮近き頃糸魚川の宿りに着ぬ。今霄も三五の月いと隈なくさし出るを見て、

行つかる旅のやつれをとひ顔の
　月は千里の影も隈なし

都路やこしかた東いかならん
　波の最中の月ぞことなる。

何くれとおもと人などゝ語りあひつゝ、とり〳〵に

題をつくりて歌よみ侍りける中に、月照松といふこゝろを、

一夜かる軒端の松にさす影も
　千世を契る半空のつき

於㆓絲魚川驛亭㆒賞㆓十五夜月㆒

桂花光滿一輪秋　明月團々開客愁
此夜驛舍傾樽酒　頻懷東都故鄕遊

幾千たびめくる盃の間に、言の葉の數にそひぬれど、くだ〳〵しければ、書もらし侍りぬ。夜も閑に成りぬれど、暫し枕によりそひて、

鹽なれぬ磯部の浪の假枕
　月に旅寢のうきを語らん

北の海路

石榑千亦

第八信

十四日雨いみじう降るに、けふの錢函行はやめたしと思ひつれど、はやく淸水ぬしよりかなたにしらせたきつるに、待ちてあらむにはと、二番汽車にていでたつ。

四十分斗して錢函につき、川島といふ家の樓にのぼり、海のけしきを見れど、この里の半より折れて自ら小灣形をゑがき、左ははるかに小樽の沖を經てたか島の濱邊見わたさる。こゝの有志者の多くは、今日事ありて札幌にものしつときゝ、川村長次といふをよびてこたびの設計をつげたるに、氏のことによりてしるを得たることいとさはに候。

こゝの沖は遠淺になり底はすべて砂にて、百間二百

間ばかりを出でゝ瀬をなせり。西北の風には大きなる波を起すによりて、こゝの人は一番瀬、二番瀬など稱へ、いとむづかしき關と思へり。この關たる、あやまらずこゆることを得れど、中は波もやすらかになりて、よしや船底の砂に入ることありとも、直に破るが如きことはなしと申候。

錢函は疑もなく其實をいひあらはしたる名なり。されど其意は二通りにきこゆべし。一は日和山の下にて小樽にむかはさぬ舟の如き、はた其外海にありても皆、船にても器にても何もこゝに打上げて、折々は死骸さへ吹寄せらるゝ故に、村の爲めならぬ村費さはに嵩み錢函をはたかしむる事。一は主去らぬくさ〲の物波のまに〱其海邊に集るが故に、おもひもかけぬ財を得ることあり。少さき例にても、波に浮べる鴨をうちたるに、その鴨は波これが使となりて岸にもたらせり。そを見ても思ひやるにあまりあらむ。斯く反對の意を一にあつめて、此處の名づけつるにはあらぬかと思はれ候。

明治六年の頃かとよ、一時に四十幾艘の難船ありしとか。さてもこゝには救助船は用をなさず、さる時はとても船を出すことを得ざれどなり。こゝにて救ひの器具としては、大小の船を引よする爲めに、第一に綱、又その綱のために轆轤、これぞ第一なるべき、平常は車にのせおき、それといへど直に海邊に沿へる道路を走りて、程よき處にすゑ、投綱にて綱をおくり、さて引よせむには、必其効を見るべきはいふまでもなかるべし。ましてこゝには青年組とて四十八斗の壯丁かねて其わざにつくせるを以て、それにふさはしき器具を備ふれど、鬼に鐵捧とも申すべく候はむ。かくて實地につきて見ることは、今

は終りとなりぬ。これよりは小樽と祝津と錢函と三處をまとめて、いかによく聯絡をなすかは、こゝの委員と共にはかりての上に定むべく候。十四日夕發。

第九信

夜委員山田船樹の兩氏淸水警部等相會ひ、設計のことをかたりて定めつるは、

一小樽に救難所をおき、祝津、錢函、張碓に各々支所を設くる事。

一救助船は小樽、祝津に各二艘、張碓に一艘をおく事。

一錢函は船の用なければ、そこ迄に流れざる前に防ぐべく、張碓におく事になりつるによりて、それのみぞ數まさりつる。こはおくれて來集ひし、錢函の有志川島氏の說を入れつるなり。

一器具置場は四ヶ所ともに建て、船をおく處はその置場をもつくる事。

一開所の曉迄では、すべて特別委員に任せて、事務を取あつかはしむる事。

一見張所は祝津と錢函とにおき、祝津のは日和山燈臺看守に、見張を囑託する事。

一救難所と支所との急報は、小樽錢函間は電話其他は直夫を用ゐる事。

一建築、造船悉くなりたる上は器具を備へ、さて役員を定むる事。

一役員定まりつる上は直に開所し、擧行式は來年五六月頃にものする事。

一救助夫は五十五名とし、小樽と祝津とに三十名、錢函に二十名、張碓に十五名をおく事。

斯く定りていよ〳〵着手する事になりつるによりて有志者は熱心湧くが如くなれど、思ふに時をうつさ

ずして功なりぬべし。會長も兩手をあげていたく喜され候。あはれとく開所の運にならむことを祈りてやまぬ事に候。

明日は札幌にものして、この有様を委員部につげ、さて歸途につくべく候。十四日夜半發。

僻陬雜觀

紫光

(三) 麥畑

漸く一二寸ばかり青みたる麥畑を、鍬もて耕すは、五十余の夫婦のものなり。ともに浮世のなみだにたゞよひたるさまは、額のさまにもしるく、家もよからねばにや、着たるものもいとまづしげにつゞられたり。しばしありて爺は、

　のうれ近、われもいつになつたら樂ができるかしら、考へればいやになるな。かうやつて齷齪小作をしても、少しもゆつくりとすることもできずさ。

と、鍬を止めてかたれば、われ近も腰をのばしつゝ、

それはさうさね、文吉がもう少し年でもとつてれたいゝが何せ、まだ十やそこいらでは何ともならず、われ今に婿をとれもふても、こんな水呑百姓の家に、なかなか來人はなし。文太郎でも生きてゐれば、ことしは廿五にもなるのだから、大きに樂もできたが。

と、これもかなしげなり。

二人はしばし無言にて、野の彼方をながめやるに、折柄良に、烏の二聲三聲なきすてゝ鎭守の森に羽をとゞむるも淋し。夫は、ふと田の畔つたひに來る二人のものを見つけて、

あすこにくるのは、お今に文吉でないか。

妻なる人もおなじ方をみやりて、

あゝさうにちがひなしですよ。何しにきたのかしら。

といふ、やがて、お今は近づき來りぬ。二子の赤縞の綿入に、メリンス友禪と黑繻子との腹合の帯をしめて、羽織は着ずで前垂がけなり。文吉とよべるゝ弟は、手に菓子の袋をもちて、姉よりもらひたる嬉しさに、前にたちて走りぬけきて、

母ちやん、これ姉ちやんにもらつたの。

といふも息せきあへず、少おくれて姉は田のくろにたちて、挨拶などすみたる後、

けふはそこまで御使にきたかへりですが、文吉が道にゐたので、ついてこゝまで引張られて來ました。

といふ。さはいへ、すこしひなびたりや。

さうかい、あまりおそくならぬやうにおかへりよ。あの別莊の奥樣は大へんいゝ方だてぢやないか、おまへの仕合だよ。しくじらないやうにしておくれよ。

と母のいふに、

あゝ、やさしい御方なので、私も大へん樂で、まるでうちのやうにおもふくらゐです。それはそれと、お父さんの持病はこの頃はよいのですか。

父は腰をさすりつゝ、

おかげでこの頃はさつぱりよくなつたが、どうも年がよると、めつきりさむさがこたへてしかたがない。今もこゝで婆さんと愚痴をこぼしてゐたのさ。

といふ。

ホンにさうでござんしやう、私もいつまでこうして奉公ばかりしてゐたくもなく、早く御父さん御母さんに樂をさしてあげたいのだけれども、何をいふにも、

といひさして娘は下をむく、母もこらへず、

早く、お前に聟でももらつて、初孫の顔でもみたいものだが。

とかこちて、これも涙は眼にみちたり。ひとり無心の文吉は、菓子を袋よりとりいだして、むしや〳〵頬をうごかしつゝ、

あゝうまい〳〵、母ちやんにもひとつあげやうか。

未亡人

海東子

やがて手に取るばかりに、富士の高峯を書齋の窓に据ゑ、砂崎遠く打續く、青松原を軒隣とし、朝夕田子の浦景色を眺めながら、さても、この稀有の勝地にも、徐に心を慰め兼ねて、春のあした、秋の夕暮、とかく、見るもの、聞くもの、先れも涙の種となり、海女の汲む藻汐に袖ぬらす、そも、妾の身は、果報か、因果か。

五月蠅しとて、都の塵を打拂ひ、我夫の好のまゝに、此處に搆ひし此別宅も、今はなか〳〵に、思ひのたね。如何に、軍職に暇無ければとて、三日と此屋に尻を据給ひし事、數ふれば唯の一度も、おはさねど忘れもせじ、日清の平和破れし時、世に魁けて、先鋒の隊を率ゐるとて、小躍りして、此處に來給ひし

が、今更思へど互の見納め。短き夏の一夜をさへ、此屋に明しかねて、門出を急ぐ我夫、せめては停車場迄もと思ふを、女々しとて、さへぎられ、心ならずも此屋の軒に、遠征の門出を送りしは、明治二十七年七月七日。これよりは、雨につけ、風につけて、夫の上を思ひやりつゝ、夢は唐野の空に迷ひ、寝覺勝ちなる枕の下には、露の玉さへ干ぬものを、覺悟の前とは云ひながら、國の爲とは知りながら、過ぎにし、旅順の激戰に、討死し給ひしと、聞きし其時

妾の心、泣きもせぬ、嘆きもせぬ妾の心、武官の妻とはいひながら。如何に思ひ直せばとて、心の中は、わきかへる野澤の泉にことならず。片身にとて、送り越されし血染の軍刀、夫の劒に冥土の供、一思にとはやりしが、流石我が子のいとしさに、

夫が遠征の砌、妾は懐姙、しかも臨月には程もなし、心強く行かれし夫も、流石に後の案じられしか、折々の便りにも、其事ばかり、やがて、美しく生み落しゝは此義雄。彈丸雨飛の間にも、妻子の事迄、思はされてかと、嬉しかりしは當座の喜。…………すがたは夫に生寫し。脊丈延びるに從ひて、片事交りに、父様〳〵と、知りもせず、見もせぬ父を慕ふ子を見るにつけても母親の胸はたゞ〳〵張裂くばかり。吁々、おとなしく育て上げ、せめては、夫に唯一目、と…………其儘我子を抱き上げて、一と間のうちにぞ、しさり入る。

厳しく、床の間に祭りしは、武官の寫眞、虎髯胸に破れ、鋭眼人を射るばかり。前に据ゑし木碑には、故陸軍砲兵中佐村上義則。…………寫眞を見つめし目をぞ、我子に向けし未亡人。稍しばしは默然たりしが、せきくる情熱おさへ兼ね、おとす涙はハラハ

ラ〳〵…………。

（完）

才くらべ（二十）

蓬生屋女史

大和國の女の才

むかし、大和の國に男ありけり。男、妻ある身にて、こと女をめで、本の妻と壁一重へだてたる家に迎へ來りて、もろともに住み、月比ふれども、本の女許つゆれとづれず、されどそゝ妻女つゆねためる氣色もなくて過ぎけり。折りふし、秋の夜のつく〴〵とながきに、ひとりぬる床に風さへさゑて、ねぶれぬ枕に鹿の聲の聞ゆるも悲しく、袖をしぼりぬるに、夫なる人、本の妻に向ひ、彼の音を聞き給ふやと壁ごしに問ひけるに、妻女淚をぬぐひ、

我もしかなきてぞ人に戀られし
　今こそ他處に聲をのみきけ

と答へたりしに、男限りなくめでゝ、後の妻を送り、本の妻とすみけり。色よりも才こそは勝ちにけり。

源賴政の才

兵庫頭源の仲正の子、三位賴政は、六孫王經基の子、多田滿仲が末にて、武藝もいみじけれど、才もまたかしこく、和歌の浦波、たちもれくれざりけり。此人、久しく大內の守護にて有りながら、雲の梯餘所にのみ、見て年をへける事のなげかはしく覺ゆるまゝに、

人知れぬ大內山の山もりは
　木がくれてのみ月を見るかな

との歌をつくりて奏上しけるに、天皇あはれみさせ給ひて、昇殿をゆるされたり。此の人、弓の達人に



て、かつて、高倉院の御時、御殿の上に鵼の鳴きけり。此の鳥はいと小さき鳥にて、晝は出でず、夜に至りて鳴くあやしき鳥にて、此の鳥のなくはあしき事なりと、むかしより云ひ傳へたる事なれば、如何すべきと、帝をはじめ奉り、

人々さやぎける中に、或人、頼政に仰せて射させらるべきよし、奏し奉りしに、さりなんとて、速に召されて參りにけり。帝、此の由を仰せられけるに、頼政畏つて宣旨を承け奉りしかど、心の中に思ふやうは、晝だにもさゝやかなる鳥なれど、射る事難きをまして五月闇雨さへいみじうふりふたがりたる中をいかで、射とめん。我れ此處に弓箭の冥加つきにけりと思ひて、八幡大菩薩を一心に念じ奉り、聲をしるべに、矢を放ちたりしに、ふと答ふるやうに覺えけれど、よりて見しに、あやまたず當りにけり。天氣より始めて、人々感歎云ふばかりなく、後德大寺左大臣、その時中納言にて、祿をかけられつゝ、

郭公名をも雲井にあぐるかな

頼政かづきつゝ、とりあへず

弓はり月のいるにまかせて

と付けたりけるぞいみじかりける。此の才もて、弓はり月の光りいよ〳〵かゞやきける。まかり出で後、帝、

昔養由雲外射レ雁。今頼政雨中得鵼。

と仰せられて、いたく感ぜさせ給ひけるとなり。

笠子笑談集

金津常十郎

こは、笠子山人の談話を集めて、わが高祖宮井安泰がものせしものにて、註を加へて各修身の道に叶へるを示し、笠子笑談集と名付しものなり。白鶴とは、易學を受けし故の雅號なり。このふみや、幼なき孃等に臍をよらせ、註によりて忽ち自得の思をなすの笑話なれど、文の拙なるを顧みず、女鑑に掲げて、聊孃たちが徒然の

なぐさみにとてなん。

序

笠子山人は、其ひととなり、敢て名づくるに由なし。世の人先生の三河人なるを知る者なし。目して或は智とし、或は愚とす。予はじめて先生の門に至る、去らく有て先生まづ問ていはく、汝何を以てか爰に來るや、我答て曰く、足をもつて爰に來る。先生笑をふくみて曰く、あゝ去らず、もし足をもちて來らば、蝸牛は何をもつて行くや、汝試にまたいへ。我答ていはく、然らば眼をもつてして可ならんか。先生大きに笑ふて曰く、あゝ去らず、もし眼を以てせば、盲人は何を以て歩むや。汝試に亦復いへ、爰に於て、我茫然として心なきものに似たり。暫く有て、我その凡ならざるを知て再拜し、敬して業を先生の門に受けん事を願ふ。先生則ちゆるす、而して學ぶこと爰に年あり。けふに至りて少しく先生の門を窺ふ事を得たり。然りと雖も、これを、望めばいよいよ遠く、是を探ればいよいよ深く終に底なきものに似たり。時として先生の術を見る事あり、泣者をして忽ち笑はしめ、喜ぶ者をして忽ち怒らしむ。馬をさして鹿となし、僞を吐ては誠となす。其變化きはまりなし、實に造化の巧を奪ひ得て自ら乾坤胸中に藏す。故に、鯤魚も鳩尾に跳り、大鵬も腹中に飛ぶ其性、智にあらず愚にあらず生ある者の如く死せる者の如し。是その智愚生死の際に心を容れざればなり。門弟子平生問ふ事あれば、先生只一話をつくりて是に示す、敢て他をいはず。其言皆中らずといふ事なし。我、その示さるゝ處の話を少しく集めて一書となす。是其先生の舊意にあらず。只弟子の問ひに應じて示されし一話のみなり。予初弟子の爲に是

が註をなして、後生の助けとす。題して笠子笑談集と云ふ、見る者後年其耳をとつて鼻をかむことなかれとえかいふ。

白鶴散人識

笠子笑談集

白鶴散人註

鼠の私恕

ねずみ馬に向て曰く、そこもとの形を見れば、我がたちを何百合せたるともえれぬ大きなる形なり。われは形のちひさきゆゑ、もしも猫の追ひかくる時は、ちよいと節穴、又は物のはざまにかくれて生命をのがるゝなり。貴殿はそんな大きな形にては、猫の追ひたる時はいづこへ隠れていのちを助かり給ふやといふ。馬歯をむき出していはく、ひゝひんひん。ねずみまんまるな眼にかどたてゝ云。あゝ馬の耳に風とは此の事か。

註に曰。これ世俗の人皆偏よりたる已れが小さき心を以て、他の人を推量するにたとへたり。諺に云わが好は人にふるまふ。と云と同じことにて、吾もかく思へば、人もかく思ふものと、所謂自分きゝ届なり。もし、向の人も、同様なる者ならばさもありなん。一段上なる心の人ならば、さぞ可笑しく彼の馬と同く笑ふべし。却て已が偏見をもしらずして、吾云ことは、向の人はまだ分らぬそうなと思ひ、とかく自分は何もかも能と心得て、馬の耳に風などと、人を見下すなり。大人より是を見れば誠に恥べきことならずや。古語に曰、人出二一言一知二其長短一。

二盲の道行

盲目初てゆく道あり。此内一人の盲目は、豫て其道

筋を人に尋ねてとくと覺えたき、扨てしつたふりに
て先へづか〳〵と行けるが、この道の間に、近ごろ
堀ができて、細き橋の掛りてある事を、彼のをしへ
し人はしらず、習ふた盲人は猶々しらぬはずなり。
それゆゑ、きづみなくづか〳〵と行きければ、彼の
堀へどつたり落て、思ひもよらぬ事なれど大きに水
をくらひ、どぼ〳〵うろたへまはり、誰ぞ助けてく
れと、高聲を出しけれど、やう〳〵通りの人が聞き
つけ、とかくして引あげられ、生命から〳〵よろば
ひまはり、さきの騒に杖もうせてしまひ、先へもゆ
かれず、そこより四つどひになりて内へもどりける
が、かの跡からおくれて行きける盲人は、自分の杖
にてしづかにさぐり〳〵、疑はしき處は通りの人に
問ふて歩みけるゆゑ、例の堀にかゝりたる細き橋も
やすやすと渡りて、先の心あての所へ行きつきぬ。

註に曰、是亦世の人萬事の道に付て學び、又聞も
せずして、得たふりする人のたとへなり。よろづ
の事習はぬ先は皆盲目と同じ、其敎にさへ隨ひて
學べど、過はなけれども、はやそろ〳〵敎の道具
だてもあらまし手に入かゝると、自分のチヨコサ
イが起りて、是でよいことと心得、口では急度し
たこと云て、どこやら物知たやうに見ゆれども、
僅の利を見ては忽ち心がくらみ、或は平生めつた
に吾名を高くしたがり、又拍子が違ふと、酒の淵
へとばし込み、色の堀へまくり落ち、終には身を
失ふにも至るなり。是みな盲目の杖を失ふと同じ。
古話に曰、名利醉レ人甚レ於レ酒。と、誠に愼むべき
ことなり。

結髪

第一回

白魚女史

やよ〳〵、園田樣〳〵、御待ち下され園田樣と、手をうちならしつゝ、竹の皮のより結の水下駄を穿き、巾廣の前掛を風にひるがへして、しきりに追ひかくる姿さへひなびたる一人のはしため、あな耳遠き御方や、これほど呼ぶに、あれ〳〵、とう〳〵まがり給ひしよとつぶやきつゝ、走りつかれてか、ほつと一息たゝずみて、またもやすた〳〵とかけ出しぬ。

このはしためよりは二三町ばかり前の方に歩み行く一人の少女の年の頃は十七八、かゝやくばかりうるはしき顏に、何處となううらはづかしき色見えて、まだ世なれぬさまかたち、阿孃樣龍岡町迄參りませうと、客待の車夫の呼びかくるに、あな、こち側を通るではなかりしに、さるにてもをかしや、どうして處を知りしならん、車夫のゆだんのならぬ事よと、少しほゝ笑みながら、蝙蝠傘を眞深にさしかざして向ふ側へよけぬ。

園田樣〳〵と、なほ息せき呼びくるはした女の聲に、通行の人思はずふりかへりぬ。前きなる人さへ見かくるに、園田樣にはまだ聞こえぬにやと云ひつゝ、なほも手をうちならしぬ。何を考へ給ふ、よき人の追ひかくるは御身ならんに。と、職人風の若き男、園田孃の傘のうちをのぞきこめど、令孃ははつと顏に紅葉を散らしつゝ、なほふりむきもせず、いよ〳〵傘を深めて行き過ぎんとする飯田橋内、園田樣と一際高く呼びさけぶ女の聲のやうやく耳に入りてや、少女ははじめてふりかへり、苦しげに息をつきて、なほあへぎ〳〵よりくる下女に、少しあゆみよりて、な

にか御用にやととひかくるに、先生の御悩み今は少しおこたりたれば、講義いたさむ、呼び歸せとの御仰せ、恐れ入り侍れど、今一度歸らせ給ふやうにと下女の胸なでながら述るに、少女はいとゞ氣の毒げに、否今日はと云はせもあへず、誠に遙々の所を通はせ給ふ君、是非に呼び歸へしまつれと御主人の御仰せなれば、是非、どうぞ、あな、最早御快ようならせ給ひしとの給へば、さやうに仰せ給はでと、下女しきりにつれだゝむとすれば、折角におこたらせ給ふ處を、またわづらはし奉らむは心すまず、今日のみはまげて休ませ給ふやうにとおしかへすを、今朝ほど御主人が、今日は頭いとうなやめば、何れの人にも面會斷りくれよと仰せ給ひたれど、貴孃ばかりは今一度伺ひて見ばよかりしを、さし出でたる私の罪ゆるし給ひてよ。御身のこされでは、私が御主人へすまざればと云ふに、令孃もふりきりかねて、さらば、とにかくに今一度ものし侍らむ。さなにても御用の多からむに、長うひまどらせしよとて、本包を抱へなほし歩みかくるに、私こそはあなたにむだ足をおさせ申して罪ふかゝり、されどそれにて御主人への申わけは、私の心もすみ侍りぬ。さるにても、御遠方の所を、よう／＼、いつもお通ひ遊ばさるゝ事よ、されば御主人も貴孃ばかりは、いつも待せ給ふに、私は心なく先きほどもあのやうにおことわり申し參らせてなど、わびつ、ほめつ、何かと述べつゞくる下婢に、二三歩先き立ちて、少女はどう致してと、折り／＼答ふるばかり、ふりかへりもせずにあゆみたり。

第二回

戻りはもどり來たれど、少女はいたづきの中をわづ



らはさむ事の心苦しく、玄關に立ちまどふを、いざ早う此方へ園田樣とて、勝手口より上りたる先きの下女の立ち出でて、案内せんとすれど、少女はなほ心すまず、とかくにたゆたふを、春子の君上られよ、もうようなりにたりとはるかに師の呼ばるゝ聲、思ひしよりは太う聞えしに、少し心輕うなりて立ち上れば、今日は此方へと導くは師の居間なり。むさけれど、今日は此處にてと聲かくるは深見求春とて、年は三十路ばかりに見ゆる男の、病に姿は衰へたれど、目口そろひてやさしきが中にも威ありて猛からざるさまなり。衣服のみは常のを着したれど、床も、枕も未だあげず、聲はよろこびしげに、顔はほゝ笑めど、なやみしあとのなほ額に殘りて見ゆるに、かばかりに數ならぬ身を數へむとし給ふかと春子はめぐみの露のありがたく、身に深み亘りて、涙も催しぬべき心地、誠に御心をかけられての深き御惠み、うれしう侍れど、煩らひを重ね給はむも心苦しければ、今日のみは御心安うやすませ給ふやうにと涙ながら述ぶる聲の、師にはよくはきゝとれねど、頭下る樣子に、それと見てとり、よきにはからずや春子殿、今日は詩經の日なれば、講ずるもおもしろう、御身のこされしときゝて、よべより上らざりし頭のなやみもとみにさりたり。さるにても我が心のをかしきは、御身の春子とききてとて、ふと顔をうち守り、何故かそのまゝ音を忍び、やゝありてさやうにへだたらで近うよられよと言葉をうつすあやしさ。春子はすまぬ思ひど、部屋の異なると、ひとり近うよるの耻しさとに、心おくれて、ふすまの外にたゞれづく〳〵。

求春は何思ひけむ、春子の君、いつもの席にて講せ

むとて、もう此方にて、さやうならば遠慮致さずに入りまつれども春子があわてゝ居間へ通らむするをもきこえぬげに、つと立ちて、彼方へと行きぬ。春子はすまぬ思ひを重ねながら、つゞきて稽古室へ行き、あまりに隔たりてわづらひを重ねまゐらせしと、僅にのぶるを、いな何の心もなく、づらうの處へ通しかけ、大にあやまちぬと、先きのやさしき、笑ましき聲にはひきかへて、いとおごそかにきつと此方を見亘したるに、春子は何の心のもしらしか、ほつと顔をそめなせしが、やがて、また青くなりぬ。うち講ずる北風より二子乘舟の詩までは、汎々とうきたる思ひにきゝ過ぎぬ。之はよき詩、心入れてきゝ給へよと心付けらるゝ柏舟の詩、母は天なれども人を諒にせずと云ふ句の、いとゞ身にしみにけむ、いみじう袖をしぼりたり。



文林

旅春雨　東久世通禧

春雨はものうかりけりたひころも
　ぬれつゝあゆむ路ならねとも

禁中春雨　久我建通

大庭にはるさめふりてさひしきは
　みうまならしのおとも聞えす

旅宿春雨　松浦詮

たひやかた都にかよふゆめちにも
　障らさりけりはるの夜のあめ

野若草　津輕承昭

野つかさの梅見かてらに打むれて

もゆる若くさつむひとやたれ

山村鶯　本田忠貫

うくひすの谷の戸出るはつ音より
耳なれにけるやまもとのさと

道臣命　宮地嚴夫

天のしたさためたまひし大きみの
みちの臣てふ名こそたかけれ

赤染衛門　小出粲

名にたかきしのたの森の楠のはも
うらみかたきとなりし君かな

蛙　植松有經

せきいるゝ苗代みつのたらぬはや
雨よふかはつこゑしきるなり

春家　大口鯛二

岡のへに家をうつしてうくひすの
こゑのあるしとなれる春かな

遠村柳　岩崎勝從

朝かせになひくけふりも交りけり
のすゑのさとの青やきのいと

遠村霞　下田義天類

あやみくにふきは拂はて夕東風の
すゑまてかすむやまもとの里

筆　三輪義方

とる手には力もいらぬものなから
動かぬものは筆にそありける

源為義妻　佐々豊水

かつら川あをふちふかく沈みても
なかれぬ名こそ雄しかりけれ

窓梅　草野隆道

月さゝぬわかやま窓もさくらめに

ゆふやみしらすなりにける哉

門柳漸緑　足立正枝

わきもこかかとへの柳世のひとの
目につくはかりもえ出にけり

待花　荒波直方

やまさくら霞のおくに咲きぬやと
まつにあまたの日數へにけり

霞める空を雁かへる　蜂須賀随子

見わたせはかすみへたつる中空に
こゑもさえゆくかりの一つら

夕春雨　前田朗子

軒ちかき花のしつくにしられけり
かすみてわかぬ夕くれのあめ

里春雨　松平健子

花さきてけしきかはれる河こしの
さともおほろにかすむ雨かな

田家春雨　保科節子

すみれつむ里のうなゐら打つとひ
雨やとりする小田のひとつ家

海邊春月　小池通子

しま山のまつの梢ははなれても
波の上くらしはるのよのつき

庭若草　岩崎寧子

霜はしら木の下かけにのこれとも
あをみそめけりにはの芝生は

窓前梅　原田蒼生子

一枝はをりてかさゝんくると明と
めかれぬ窓の梅にはあれとも

里春月　中牟田常子

さかりなる花の木のまに見つる哉

今戸のさとのはるの夜のつき

望遠帆　三宅龍子

漕いでし帆影ちひさくなりにけり
いそべの貝をわかひろふまに

霞中雲雀　河村重子

聲をのみそらにのこして夕ひばり
かすむすがたの面しろきかな

雲雀　安東菊子

夕ひばりそらにうかるゝ聲すなり
芝生にのこるひなやまつらん

忠　青苔

君は神代ながらに君にして、臣はとこしなへに臣なり。さてこそ三千歳の久しき、三くさの寶他にうつることなく、弓矢もて大内にむかひししれものはたあらざるなれ。忠臣はやがて孝子にて、孝子はやがて忠臣なり。唐人のいひし其門を同じうすとは、我國の姿にして、かの國のさまにあらず。そはわが君と仰ぎ奉れるは、やがてわが父母も仰ぎ奉れる君なればなり。さばかりめでたくうるはしき姿をそなへたる國は、天地の中又二つとあるべしや。さてはよく親に仕ふるものは、よく君に仕へ奉るものなり。かの忠ならむとすれど、孝ならず、孝ならむとすれど忠ならずとは、道ならぬ親と忠なる臣とをいひあらはさむとして、徒に筆をまはせる文かきのしわざ也。わが國の情にあらず。君はやがて國のみおやなりこの親にだにまめなれば、萬の事悉くかなふ。

今様軍歌體うたひもの

欲の熊鷹といふことをいへる辭　藤井行麿

持は持はともち足らず、世上通常の利息では、已が心

に飽たらず、一時にれほく利を得んと、かけの勝負をれもひつき、米や株劵交債や、其他當世流行の、諸式に廣く手を出し、始め猪口〱利を得しに、こいつうましと大仕掛、つよきて十分賣を出し、れもふこゝろのうらかけて、時候人氣のわるきより、諸式大楊其損は、身代限を盡しても、なか〱たらぬ事となり、やけと出かけて茶屋あそび、遊びつくして花合、西洋かるたちよぼ一の、骰子までころがし其はては、親々たちのためれきし　金むかりかは家藏まで　失ふ人の世に在るを　よく〱れもへむありし世の、昔噺に熊の子が、二疋山に寢てゐるを、鷹が飛びきて其熊を、二疋ながらにとり得んと、足を左右にわけながら、爪を二疋にうちかけて、立たんとするに熊の子が、ふと目をさまし鷹を見て、驚き左右にのきたれど、鷹は二つにさかれしと、いひつたへたるはなしあり、これより欲の熊鷹と、世にたとへていふといふ、なれのはてこそくるしけれ。

雑報



●大御惠　本年三月廿三日、小笠原母島北村火災の趣、憫然に思召され　天皇　皇后兩　陛下より、罹災者御救恤として、金千二百圓を下し賜ふ。又、皇后陛下には、栃木縣那須郡育兒曉星園の奇特なる事業を聞召され、子爵花房義質氏を經て、金三十圓を下し賜へり。

●兵衞忠熈公薨去せらる、　従一位勳一等公爵近衞忠熈卿は、此程より老病にて危篤なりし處、遂に、去る十八日、御年九十一歳にして薨去せられたり。

忠熈公の祖は、藤原鎌足十七世の嫡孫攝政關白太政大臣忠通の長男攝政關白贈太政大臣正一位基實の後にして、從一位左大臣基前卿の男なり。文化五年戊辰七月十四日誕生、母は、尾張大納言宗睦卿の女靜子なり。

公、累葉攝關の家を以て華冑の首に居り、光格、仁孝、孝明の三朝に歷仕し、常に皇室の藩屏たり。

公、天資温和にして洒落、寬胸能く人を容れ、上下敬慕する所となる。岩倉具視公の如き、公によりて、親しく其の誠意を天聽に達するを得、且、公の汲引を以て天顏に咫尺するを得たりといふ。

明治十八年の春頃より、公は、皇太子殿下筆道御師範仰付られ御手本を奉り、又毎々御手習拜見として參殿ありたり。

公薨去のこと天聽に達し、廿四日午前九時、勅使として、侍從子爵東園基愛氏を同邸に差遣はされ、勅語を傳へしめ、祭粢料金八千圓、及白絹、供物を下し賜ひたり。

勅語

曾て多難に際して先皇機務の贊輔に任じ久く重望を負ひて今時名門の領袖たり躬四朝を歷て齡九秩に踰ゆ恪勤懈る莫く勞績實に夥し今や溘亡す曷ぞ軫悼に勝へん茲に侍臣を遣し賻賵を賚して弔慰せしむ

同時皇后陛下より、皇后宮亮山内勝明氏を同邸に差遣され、祭粢金二千圓を下賜ひ、又同日葬送に付、棺前、及墓所へ前同人を差遣され、各々燒香せ

しめられたり。

葬儀は二十四日、午後一時麴町の本邸出棺、上野寛永寺に埋葬せらる。當日會葬せしものは、伊藤總理、芳川内相　井上藏相　西外相　末松遞相　伊東農相西園寺侯爵田中宮相黒田樞密院議長東久世副議長峰須賀顧問黒田貴族院副議長德川公爵二條公爵其他伯子男爵幷に貴族院勅選議員各省　高等官貴族院書記官長以下各高等官　學習院　職員　生徒無慮一千數百名なりし。

●歌御會　宮中歌御會三月五日衆題の詠進歌は左の如し。

田春雨

むしろ田のかすみかくれに田つなきて　　建通
　雨のさかなる春の夕くれ

うちかすみふりつゝきたる春雨に　　直大
　やま田の小くさ色まさけり

かしましくなく蛙かな苗代の　　豊穎
　かさ田しつけきはるさめの[illegible]に

蛙なくこゑかしましきなやまたに　　利嗣
　のさかにもふるはるの雨かな

すみなれし雁はかへりて背門の　　承昭
　田面しつかにはるさめのふる

しめはへしな田の苗代年あらん　　詮
　秋たのもしくはるさめそふる

うゑつきや田中のやなきうちけふり　　光[illegible]
　ふるさもみえす春雨そふる

すきかへす牛のあゆみのしつかにも　　利[illegible]
　小雨そほふる春のあら小田

うちわたすなたの畦道みえぬまて　　忠敬
　けふはかすみて春さめのふる

はる雨のふるの小山田けさみれは　　美稻
　まきしゆたねも萠いてにけり

蛙なく田つらかすみてかけろふの　　雅之
　ゆふへしつかに春雨のふる

はる雨のふるさみれさ小山田の　　通治
　しすかなかさの雫にそしる

夕月のかけもかすみてかきつ田の　　治光
　苗代水にはるさめそふる

夕まくれせりつむこのかけたえて　　豊弘
　さは田の面に春雨そふる

わかなつむさとのをとめの袂たにて
かさ田の面に春雨そふる　任子

さきゝぬとゆたれおろしてしつのをか
かへる山田にはるさめそふる　文子

打かすみのさかに雨のふり出て
かはつもうたふはるのをやまた　祚子

しつのめかせりつむそても打しめり
かすむ澤田にはるさめそふる　貞子

うちかすむかきねのむきふつゆみにて
いほしろをたにはる雨そふる　道子

打わたすをたはかすみに来きにて
けふるさみれは春雨そふる　いさ子

ひはりなくくらしもかすみの立こめて
雨になりゆくを田のゆふくれ　綠子

はるさめはふるとみれとうちかすむ
田のものむきふぬれにける哉　好子

しつかたく夕けのけふり打しめり
田中のいほにはるさめのふる　いさな

すゝなはたかすみにきにて小山田の
かやかのきにはるさめそふる　三枝

さきまちし田の面のかはつなきそめて
おさしつかにもはるさめのふる　愛

せかすともなはしろ水やたりなまし　眞頼

きのふもけふもはるさめのふる

苗代の水にかすめる月かけは
うつりながらにはるさめのふる　殿夫

すみさしてこらはかへりしをやまたの
岸作ぬらしてはるさめそふる　正臣

たかへすとおりたつしつは春雨に
ぬるゝわひしさおもはさるらん　重嗣

ひはりなくこゑもしめりてをやまたの
むきふの上にはるさめそふる　長坰

小山田にせきいれぬ水もたまるまて
きのふもけふもはるさめそふる　有義

はるさめのきのふもけふもふるまゝに
山田のむきふいろまさりゆく　行久

ゑくつむさつさひしこらのかけもなし
小田の澤やあめさなるらん　秋香

むきのはもしめらぬほとのはる雨を
門田の水の上にみるかな　繁

小山田のかはつもいまたこゑたてぬ
夕しつけき春の雨かな　有經

かりそめにすきかへしたる小山田の
をやますけふも春雨のふる　楓郁

しつのをかゝへす山田のつちくれも
しめらぬほとに春雨のふる　鋼二

ちりつかもなくろはかりになりにけり　　正夫

しつか門田の春雨のころ

なやまたのすみれつまんさいてし子の　　胤明

かけ打かすみ春雨そふる

たにしさるささのうなゐもかけたゐて　　英一

かすむ田のもに春雨のふる

●天恩の優渥と勝伯の詠歌　徳川慶喜公三十年ぶりにて、此の程東上せられしが、陛下には、謁見を賜ひ、御懇の大御言までかけられ、種々の御物を賜ふなと、特に優遇を賜ひしかば、公は申すまでもなく、一門類族の方々も、一方ならず天恩の厚渥なるを感戴せしが、なかにも、勝伯には、深く感せられて、左の二首を詠ぜられたりといふ。

鎌倉に基開きし其末を

まとかに結ぶ今日にもあるかな　　勝安房

結ぶ上にいや張つめし厚氷

春の恵にとけて跡なし

●奠都三十年祝賀會　明治二年車駕東臨ましまし、大鼎を奠め給ひてより、實に三十年、皇澤四海に洽し、茲に子爵岡部長職氏會長となりて、來る四月十日、上野公園に於て最も盛大なる紀念祝賀會を執行し。天神地祇を祀りて、上は以て　聖徳の無量を頌し奉り、下は以て帝都の不朽を祝しまつるべしといふ。

●豐公三百年祭　豐國會の催にかゝる豐公三百年祭は、本月一日より、京都に於て執行せらる。時は正に春色駘蕩、處は之れ優美佳境、其の盛大以て思ひやるべし。

●至誠　島根縣大原郡小河内の松本平右衛門といふは、子孫二十四人を有し、今年は九十四歳の高齢に達せるが、殊勝にも、畏き邊りに、自作の精

米を献納せんことを願出で、妻たる（八十六歳）は、自ら木綿を紡ぎて其の袋を作りをれりといふ。

●重野博士古稀の壽宴　文學博士重野安繹氏が七十の賀筵は、去る廿七日、芝紅葉館に開かれたり。來會者は、氏の門弟、來賓を合せて四百餘名に及び、發起人總代の祝辭ありて後、氏は、答辭を述べ、且いへるは、自分は性來懦弱の質にて、少年の頃は到底廿歳以上の齡を保ち難しと確信せしに、年廿四五、江戸に遊學せし頃、自ら其健康ならざるを憂ひ、醫士の説を採りて、冷水浴を實行し、爾來今日に至る迄、五十年間一日も廢せず、其他衞生上には非常の注意を加へし結果として、竟に今日の壽を致せり。尙、余は、壯年の頃より漫遊を好み、最早日本全國は到る處足跡の印せざるなく、是よりは支那を始め、歐米各國に漫遊する目的なり。人として將來に目的を抱くは、是亦衞生の一法にして、精神を惰弱に流れしめざる最良の手段なり。と。言氣共に旺なり。こゝに式終りて、一同宴席に着き、歡十二分にて散會したり。本日來會の重なるものは、西德二郎、岩崎彌之助、榎本武揚、大鳥圭介、岩村通俊、花房義質、岡部長職、豐川良平、本田親雄、穗積陳重、小幡篤二郎、小牧昌業、渡邊洪基、芳野世經、高島嘉右衛門、田口卯吉、伊達宗敦、高崎正風、肝付兼行、周布公平、大倉喜八郎、岡千仭、加藤恒忠、廣橋賢光等の諸氏にして、古稀以上の人々には、小野湖山（八十五歳）青山延壽（七十六）根本通明（七十六）三田葆光（七十六）南摩羽峯（七十五）木村正辭（七十二）三浦安（七十）等の諸老あり。

尙博士より、來會者一同に博士が戊戌元旦の作に係る七絕と野口小蘋の手に成れる櫻花とを彫刻せる銀

杯を配與されたり。

●萬國婦人矯風會々頭死す　無冠の女王と呼ばれて、其の名世界に高かりし萬國婦人矯風會々頭フランシスウ井ラード孃は、去る二月十八日、米國紐育府にて永眠したり。我が國婦人矯風會の有志者は、去月廿七日、之が追悼會を催せりといふ。

●卒業式　女子高等師範學校、東京女學館にては、さる三十日、女子職業學校にては卅一日、東京府高等女學校にては本月二日、孰れも、卒業證書授與式を擧行せり。

●女子職業學校　は、さきに校舍を新築し、生徒を增加して、大に擴張を計りしが、尚、卒業生は、近來諸方より招聘殊に多く、小數の志願者にては、到底其の需要を滿すに足らざるを以て、今回、更に、裁縫敎員養成科なるものを設け、修業期を一ケ年とし、廣く志願者を募集したり。尚又、同校にては、今回特に割烹科なるものを設け、修業期を八ケ月とし、前後兩期に分ちて、四月一日より、有志の女子に敎授するよしにて、學術は、內務技師醫學士吉川榮氏實習は、近衞公爵家の家庭敎員小川すみ子擔任し、日常厨房料理法を簡易に敎授するといふ。

●埼玉女學校　此度新に設けらるゝ埼玉女學校は、愈本月初旬より開校すべしといふ。

●日本女子の大學生　京都府の山口芳子といふもの、此度米國エール大學に入學したるが、日本婦人にして同大學に入りしは、君を以て嚆矢となすといふ。

●勤勉の敎員　あり、相川五兵衞といひて、石川縣上金石尋常小學校に、此の校創立より敎員となり、僅かばかりの俸給も意とせず、本年已に七十餘歲の高齡に達するも、猶勤勉壯者の如し。年少の敎員、此

の老師の化をうけて、只管精勵するといふ。

●孝子　失明の母ありて、依るべなきに、不自由ならんことを顧ひ、其の夫に離縁を乞ふて、之が看護に從事し、十五年間一日の如く、孝養を怠らざる稀世の孝子は、愛媛縣の矢野かど女。

●又孝子あり　宮城縣遠田郡南鄉村字二郷に住む高橋長吉は、妻みよと共に、赤貧の中に、癈疾の老母をまめやかに看護し、十年一日の如く、嘗て懈らずといふ。

●少女の龜鑑　高知縣尋常師範學校附屬小學生山崎末子は、學業優等にして、且、祖父母に至孝なるを賞し、校長より褒詞を與へられ、一校の龜鑑となれりと。

●奇特の少年　長野縣西筑摩郡駒ヶ根尋常高等小學校生徒有志者は、同學生徒二十余人が、二月廿二日夜、火災に罹りしを愍み、應分の義捐をなし、書籍器械の購入を助けたりしが、就中、尋常四學年平田稻男(目下十才)は、平素學校より歸りし後、薪樵り、其他家事の手傳をなして相應の貯蓄を爲し居けるが、今回四拾錢を罹災の生徒に義捐したり。奇特といふべし。　（勝山直介通信）

●歌文募集　山梨縣出身の小林貞子といふ婦人は、ひさしく熊本縣下の絹織場の女敎師にて、數百名の織女生徒を篤實に敎育しつゝあるが、本年六十一歳に及びぬとて、織女生徒等協ひ議り、賀宴を縣下の菊池郡、隈府町の公園地に於て開筵せんとて、左のごときすりものを出し、廣く諸方の孃等に、玉詠を懇望せり。

熊本縣絹織の女敎師小林貞子の六十一歳の祝に寄機祝 和歌 和文 の題を設けて織女生徒協力同心賀宴をひ

らき敎師の老意をなぐさめんと欲す貴孃各位金玉の秀詠を纖女生徒總代の妾等に御投與を伏て懇願す

熊本縣肥後國菊池郡隈府町
絹織場女生徒總代

明治三十一年三月　宗　幸子
鹽川廣子
右田藤子

●未婚者に狂者多し　倫敦瘋癲協會の報告によるに、英國に於て、近來非常に狂人の増加せしは、主として生存の困難なるより結婚するを得ざるに基くといふ。これは、統計によりて調査したるものにて、二十年より六十五歳に至る迄に狂氣となるものは、結婚者よりも未結婚者に多く、殊に二十歳より三十四歳迄の間は、結婚者の狂氣となるもの、十人に比し未結婚者の狂者となるもの五十五人の割合なりと。而して、この事實は、獨り男子に於て斯の如きものあるのみならず、其度多少の劣る處ありとするも、同じく女子に於て認め得べき事實なりといふ。生活の困難、獨身者の増加、狂人の増加は、文明の半面に、常に斯の如き暗黒たる形影を認むるものは、物價の昂進するものにして、爲めに慾情官能の機能は、尙ほ熾盛なるに、其慾を遂ぐること能はざるを以て、慾情官能たる天然の性分を抑ゆるが故なり。其慾情の充滿して漏らすことなきより、精神の感動して、一般の神經に差し響き、情思鬱閉して樂むことなく、或は喜び、或は怒り、喁々然として、獨語して終夜睡眠を取らざる等のことより、遂に發狂せるに至るなりといふ。

●日本女子百傑　本書は、本朝婦女の龜鑑となすべきもの一百名を撰びて、鹽井ふく子女史のものせるなり。女史は、文學士鹽井正男氏の令妹にして、其

の閨麗なる操筆の妙は、今茲に更めて言ふまでもなく、讀者諸嬢は、常に本誌に於て之を徴證せり。千古滅すべからざる賢女烈婦の行跡と、ふく子女史が優妙の操筆とは、共に學んで女子の鑑となし、永く座右に欠くべからざるものならん。殊に玉桂女史の筆になれる楠正行の母が其子を訓誨するの口繪は最も優美にして、亦本書の體面を保つに足る。

日本橋區通り　春陽堂　發行　（定價四十五錢）

●農家の細君　といふ書は、こたび新に發行せるなり。題せる如く、農家の婦女が心得べきことを丁寧に記したるにて、必要なる記事多し。元來我が國は、農業國ともいひて、全國人口の最多を占むるものは農家なり。されど、農家、殊に教育に疎き、其の婦女子に向て、日常の心得をさとすは最も必要なることにして、吾人の希望する所なり。願ふに著者の意も亦茲に在るが如し、此等の著庶幾は世に補益する所多からんか。

發賣元　東京牛込早稻田鶴卷町　早稻田農園　（定價一冊金參拾錢）

●賞品

來る四月廿日の佳題を期し、當撰者には特に左の賞品を送呈すべし。幸に金詠玉作を惜しみ給ふ勿れ。

歌文共

天には
皇朝婦女鑑（靜思館近刊）第一編第二編　各一部

地には
皇朝婦女鑑（全）第二編　一部

人には
明治の女傑 慈善の泰斗　瓜生岩（日本赤十字發行所著）　一部

秀逸に
常陸帶（安藤朴翁著）（女鑑附錄別製）一部宛



敎の庭

四月五日兼題　机

天　大阪市西區北堀江通三丁目十八番屋敷　林　わさ子

よるたひにつむ言の葉の數そひて
うれしき友はつくゑなりけり

地　越前國敦賀町富貴木崎方　須磨純子

へたてなき學ひの友のほかにまた
親しきものはつくゑなりけり

人　東京市下谷區徒歩町二丁目十六番地大島俊二方　住山幾子

怠らすよるとはすれと老いぬれは
塵こそつもれまとのふつくゑ

人　羽後國西平内町　飯塚むつ子

世の中のはたしなき身も朝な夕な
はなれかたきはつくゑなりけり

秀逸（十五首）

波風のをさまれる世は海人の子も　永井さい子
つくゑの島によらぬ日はなし

朝ゆふに友としたしむふみつくゑ　三谷起美子
千代もくちせすわか名傳へよ

睦ましくからのやまとの言の葉を　諸井久良子
ならへてみるはつくゑなり鳧

雪の朝はなのゆふへもはなれぬは　舘脇ます子
まなひのまとのつくゑなり鳧

のかれ居て文よむ窓のつくゑには　名取よし子
うき世の塵もかゝらさりけり

わこたりの塵を拂へはこゝろさへ　名取正代子
きよくなりぬる文つくゑかな

朝な夕なむかふつくゑの上にしも　坂田きみ子
匂ふこゝろのはなは咲くらむ

親しくもむつひけるかなあさ夕に　仁保しま子
つくゑのもとは離れかたくて

なにはつを習ひし日よりあさゆふの　外川とい子
親しきものはつくゑなりけり

あさなゆふなまなひの海に遊ふみは　屋摩高繁子

つくゑの島によらぬ日ぞなき

朝夕にまなびのともとしたしみて　失名
ちりをはすゑし窓のふつくゑ

人こゝろうつろひやすき世の中に　飯塚みづほ子
變らぬともはつくゑなりけり

朝夕にむかふまなびのふつくゑは　丸山かつ子
したしき友のこゝちこそすれ

あさゆふに心へだてぬ友はわれと　野中あさ子
猶したしきはつくゑなりけり

ひと筋にまなびの道をたどるみは　河野文子
つくゑの島そよりどころなる

（以下原稿到着順）

文つくゑをまなびの城さたのみつゝ　沼澤みれ子
こゝろのたまをみがくをしへ子

すゝりの海ふでたてやまの背のはも　西川順子
つくゑのしまにに住ふなりけり

机こそあさなゆふなのわがこゝろ　佐々小琴子
なほくたゞしくみちびきにけれ

まがりゆくこゝろを直くなすものは　佐々有鄰子
むかふつくゑのちからなりけり

いにしへの文のはやしにわけいりて　横山柳子
つくゑのしまによらぬひぞなき

にはまつの木の間にのこる月かげを　磯部しう子
つくゑの上にうつしながめん

硯ふるゝさきもあれさもをしへ子が　高橋きむ子
まなびのしろさまもるふつくゑ

ひらけゆく文のはやしに今日もまた　樋野龍子
いりてつくゑに寄るぞたのしき

老ひさもわかきしさもにふみみんさ　堤　彩子
はなたぬものはつくゑなりけり

思はれさよればまなびのひもをさく　井田みさ子
まなびのおやのつくゑなるかな

わがいまのゐすを守れる我がつくゑ　山内鶴子
かへりおそしささぞやまつらん

文つくゑに寄ぬ日ぞなきいさまなき　稲原菫子
わが身ながらもこゝろはかりは

むかしよりなべてのうしは皆よれり　小田中靜子
まなびのまさのもさのつくゑに

ふでをさり文ひもさかんたひこさに　浦井豐子
まつよるものはつくゑなりけり

はゞせまきつくゑによりて開けゆく　河田いし子
よのありさまもまなびてぞしる

親しきはつくゑなりけりいつさても　羽田三緒子
まなびのみちのさもさたのめは

あさ夕のさもさなれにし文つくゑぞ　溝口良子
わがおこたりをいさめがほなる

玉ひろふひかりはかたきともし火に
身をたすくるはつくゑなりけり　木村きく子

雪のくれ夜中のほたるもそれながら
代々にたのみのつくゑなりけり　田中ゑん子

つくゑてふものゝかたちは小さくも
そがいさをしのひろくもある哉　某女

花もさきみもなり出てんめさしこそ
日ことにむかふつくゑなるらめ　三井信子

おこたりの塵をはらひて文つくゑに
よりみるよはそたのしかりける　長松かれ子

なき人のなれしつくゑにおもかけを
しのひながらにうつすことの葉　竹村竹里子

なにはつを學ひし世よりなれきつる
つくゑにまさるともなかりけり　淡谷いく子

世のなかのひらくるまゝに人みなの
ともとたのむはつくゑなりけり　能登くめ子

あまの子も濱の千とりのあとふみて
つくゑのしまにあそふみよかな　谷口ふさ子

ふつくゑをはらひ清めてあさことに
むかふこゝろそたのしかりける　山根久子

としなみはつくゑの上によすれとも
かきつむたまもなきそかなしき　綿野りき子

むかしより學ひのまとのともとして
したしきものはつくゑなりけり　小松好子

よの中のなにはのあしのことのはも
つくゑのうへにみはにけるかな　加藤さく子

文つくゑのたかきいさをは治まれる
御代のひかりにあらはれにけり　池田みさを子

朝な夕なふみよむ身には文つくゑ
こかねにまさるたからなりける　高橋たもつ子

あさことにはらふつくゑの塵はまた
わかおこたりとゝもにつもりつ　磯野こと子

事しけき身も朝ゆふのいとまあらは
つくゑのしまをはなれすもかな　太田さき子

をりをりの花ももみちもつくゑしま
よりて見るへきところなりけり　太田淑子

おほかたの文よむひとのあさゆふに
こよなきともとむつふふつくゑ　濱野時子

ちりはらひこゝろきよめてあさな〳〵
むかふつくゑそ我かたからなる　西艶子

あさな夕な學ひのまとにふみをよむ
つくゑのいとゝなつかしきかな　赤沼香枝子

いろはより積み重ねたるふつくゑは
わか身につきぬまもりなるらむ　所さい子

あさなゆふなまなひのうみの玉藻をは
つくゑのしまにかきあつめてん　石井信惠子

ふつくゑにつもれる塵に日をふりし
わかおこたりの知られけるかな　武田粲子

身をたつる學ひはしめのいしすゑは
ふみよみならふつくゑなりけり　佐々木はつ子

いわけなきころより馴しふみつくゑ
なといまさらにみをうらむらん　谷野ゆかり子

ふつくゑにけふもより居てひは暮ぬ
ふみのはやしにわけまとひつゝ　谷野みれ子

なれなれしまなひの窓の文つくゑは
世にたくひなきともにそありける　清水すみ子

もしほくさかきあつめんと思ひつゝ
つくゑのしまにつもるおこたり　藤村磯子

朝ゆふにむかふかゝみのそれならて
ふみよむともとわれはなしけん　山田璋子

からやまと深きまなひのおくまても
そのいさをしそたかきふつくゑ　錦織るち子

あさなゆふなちりうちはらふたひ毎に
うれしきものはつくゑなりけり　小松郁子

たゝ一人つくゑのしまにさまよひて
おきつたまもをたつねくらしつ　星野榮香子

人のみちならふはるよりあさな夕な
つくゑのもとに倚らぬ日もなし　星野千里子

あさな〱むかふつくゑも怠たりの
こゝろとゝもにちりそつもれる　青木たま子

かきつめしむかしの人のことのはを
つくゑのうへにみるそたのしき　吾妻ちか子

文まなふつくゑによりてあけくれの
うきてふこともわすれはてけり　戸塚てつ子

ふつくゑのふりたるかひもなかりけり
なにまなひ得しあともなき身は　大寺泯迹子

こゝろなくつくゑとかろく人はいへと
そのいさをしのひろくもあるかな　小澤ゑん子

あさ夕のかゝみとはせよおこたれは
ちりおきくもる文つくゑのうへ　高砂き代子

朝な夕なつくゑのしよをあされとも
かきあつむへきことのはもなし　岸田はつ子

さきわかす文のはやしをかきわけて
はなももみちもみゆるふつくゑ　河村君子

つくゑこそ吾師なりけれおのつから
よれはふみみるこゝろいてきぬ　小川愛子

あさゆふに向ふつくゑはいにしへの
あとをみわたすうてななりけり　久間春子

あさ夕にこゝろへたてす倚り添ふる
つくゑそおのか千代のともなる　佐藤喜代子

いにしへのかしこき人とかたりあふ
こゝちせらるゝふみつくゑかな　塙いさむ子

あはれこの草むす宿にうもれても
われにまことのやれつくゑかな　松原丑子

我かためにこの賤か家にうもれはて
なさけもふかきふみつくゑかな　松原不二尾子

ちきりける人のかたみのつくゑゆゑ
あたにもちりはやさささりけり　松原文子

もし保草かきあつむとて今日もまた
つくゑのしまによりくらしつる　近藤服子

ちゝ君のゆつりたまひしみつくゑは
おのがふみみるともにそありける　田代治子

花もみちみちにもまゐてたのしきは
しつけきまとの文つくゑのもと　金原吉子

わけゆくも限りしられぬふつくゑの
うへこそひろき道にはありけれ　穗積稔子

つくゑ島日々にたよりて倦むなくは
まなひのうみのはてもきはめん　押元さかゑ子

つくゑ島日ごとによらはいやひろき
まなひのうみのはても見ゆらん　三瀦みさを子

あたらしきふるきひしりを友とする
わざもつくゑのいさをなりけり　佐久間八重子

ふつくゑと睦みかはせはいつしかに
さゐある身ともなりぬへきかな　賀屋壽子

おこたれは塵にうもるゝつくゑこそ
まなひのおやといふへかりけれ　工藤仁子

筆とれははなもゝみちもさきならて
さくはみやひのつくゑなりけり　工藤優子

頬つゑをつくゑとこそはなりにけれ
ふてもこゝろにまかせぬすして　工藤雅子

したしとはおもはされともあさ夕に
はなれかたきはふつくゑのもと　尾田福子

あさゆふにをしへのみちを學ふにも
つくゑはおなしともにそありける　清水千代野子

いと狹きつくゑなれともこれこそは
ものまなふ身のもとゐなりけれ　小田きみ子

せまけれとつくゑの島にしけりあふ
をしへくさこそかきりなからめ　眞島千鶴子

ひらけゆく文のはやしにふてのはな
にほへるもとはつくゑなりけり　徳永眞壽子

なつかしきものはまなひの誰もみな
ふみよみしるすつくゑなるらむ　川崎千賀子

おくふかき文のはやしにわけいりて
ふてのはなをはもとむふつくゑ　河原よし子

あやにしきとり〳〵にほふ言の葉を
かきあつめたるふみつくゑかな　渡部千世子

上もなきこゝろのともにふみゝらん
おもひつくゑそよるへなりける　尾立さみ子

開けゆくみよのめくみに海人のこも
つくゑのしまにわけあさるかな　外川益子

うなゐらかあさな夕なによりそひて
したしきものはつくゑなりけり　山崎惠子

朝ゆふによる文つくゑはくらゐやま
のほるはしともならさらめやは　星野しん子

おほかたのうたよむ人もふみひとも
なへてつくゑはよろへかりけり　唯田ふん子

唐きにてつくるくつゑのくつろさも
まなひのみちはよにそつきせぬ　北村左枝子

文つくゑにむかへはこゝろ靜まりぬ
おもへはものゝみちしるへなり　矢島にい子

友もなきかたやまかけにわひすめは
したしまるゝはつくゑなりけり　金森俊子

もしほ草かきあつめむとけふもまた
つくゑのしまをあさりくらしつ　上野君子

ふりわけの髮をあけつゝ今日までも
あさなゆふなにむかふ文つくゑ　岡澤のぶ子

言の葉をみかくのみかはあさゆふの
まなひのともはつくゑなりけり　絹川ますゑ子

をとめ子の文をまなひのふつくゑは
ことはのはなをつむたよりなり　熊田艷子

ちりつもる身のおこたりはあさ每に
むかふつくゑのうへにこそしれ　折田さい子

文つくゑの上のちりこそおこたりの
わか身につもるためしなるらめ　伊藤はん子

ふつくゑの塵みるたひにおもふかな
已かまなひもかくこそありけれ　杉村貞子

よむふみのかすにはあらて怠たりの
ちりのみつもるわかつくゑかな　服部かつみ子

こゝの重のかしこき竹のふみをたに
のするつくゑの身こそたふとき　梅園ふみ子

何ひとつなしゐしこともなかりけり
こゝろつくゑにけふもよりゐて　濱田直子

開けゆく御代のめくみのくさくさを
ふみよむまとにおくつくゑかな　稲原たま子

いにしへのおもかけうつす文つくゑ
あさゆふなるゝひとそうれしき　福原しけ子

人なみのかすにいらむとあまの子も
つくゑのしまによらぬ日はなし　駒井一女

みるのみそつくゑの島のはなもみち
をりえぬ枝のおほくもあるかな　宇高まつ子

ふつくゑによりてふみよむ其ほとは
こゝろにちりもかゝらさりけり　由井澄子

ことのはの花もにしきもたえせぬは
ふみよむまとのつくゑなりけり　白石梅子

あさゆふにちとせの友とうちむかふ
まとのつくゑそなれてひさしき　下元もと子

朝ゆふにむかふつくゑはふるけれと
ひゝあらたなるふみをこそよめ　近藤よし子

いつとてもひとりはあらぬつくゑ哉
ふみふてすゝりともおほくして　濱とみ子

雪ほたるあつめしひとのいにしへを
しのひてまなふふつくゑのもと　榊原みさを子

降る雪のふりにしことなみつくゑに　田口時子
ふかくつもれるうたはみにけり

世なすてゝ山に入る身もふつくゑは　矢名
まなひのみちのともにそありける

山さくらにほふかことくみつくゑに　菜淞子
やまとことはのはなそさきける

ふつくゑの思はむふしもはつかしや　藤井芳子
積みおくふみのなかはなもみす

數ならぬ木にてつくれと文つくゑは　佐藤玉子
けにわかともちのたからなりけり

ゐなからによゝの聞なもしらんには　片寄喜勢子
つくゑそつれのよりところなる

ふみのみちたとり初めたる少女子は　中桐李子
つくゑのしとによらぬ日そなき

ふつくゑの上によせくるしきしまの　萩原章子
ことはのはなのおもしろきかな

四月五日兼題　古戰場

天　越前國敦賀港曙區八十五番地久間右隣長女　久間春子

申さんもかしこけれど、延元の昔、東宮はた一の宮尊良親王は、新田氏其他の忠臣義士と共に、この金ケ崎城に籠らせ給ひ、世を再び吉野の春にかへさんと、目にもあまる、足利の大軍を引きうけ、戰ひ給ひし事あまたゝびなりしも、御いたはしや、御運盡きさせ給ひけん、城の中兵少く糧盡きて、同じ二年の三月、終に城陷り、一の宮をはじめ奉り、諸將郎黨、怨を九泉に呑み、忠勇義烈の名を千歳に殘して、空しくなり給ひし時の、ありさま、いかなりけん。矢叫びの音、太刀の響きは、天筒の山の嵐にたぐひ、氣比の浦わの波にきほひて、いかにすさまじかりけん。いかに物すごかりけん。今、史に見るだに、誰人かは、涙を呑み、膽を冷かにせざるべき。抑、かゝる戰場のあとゝしいへど、凄風雨を吹きて腥く、燐火夜を照らして青く、人をして身の毛もたゝしむときくに、物毎に明らけく、いたらぬ隈なく治めさせ給ふ大み代の大み惠に、明治廿三年といふ年の九月、一の宮の御神靈を、金ケ崎の宮に、いつきまつらせ給ひ、官幣中社に列せられ、いともいともうるはしく、社殿御造營あらせられ、又同じ三十年四月に、行房義顯の朝臣を始め、氣比氏治、同齊晴、里見瓜生の諸將以下、そのかみ殉難の人々の靈魂を、攝社絹掛神社としていつき給ひ、處の遊園の如くなりたれど、

かのすさまじかりけん、かの物すごかりけん、昔の有様、あともなく、松吹く風、磯打つ浪も、豊けき大み代の千代をしらべ、花にゑひ、月にうたふ人さへも、たえずなりたれど、大み神の大み心の、千歳の怨みも晴れ給ひて、いかにうれしくおもほし給ふらんと、れはけなくも思ひやり奉るにも、又たちかへりそのかみの御事ども、深く忍びまつれど

「花にのみうかるべしやは、金ヶ崎昔の事を思ひ奉れは」

「金ヶ崎御垣のもとに額づけど、春も露けき我たもとかな」

又をりをりは

「今もなほ狐火青し、天筒山嵐すさびて小雨ふる夜は」

とうちみらるゝは、またく我れもひなし故にこそあらめ。

地　　伊勢國宇治中之切町　河原芳子

櫻貝ひろふ二見の海人の子は、袖にも波の花やちるらむと詠める、二見浦のすぐれたる景色は、世の人々のあまねくしりつるところなれど、なまじひに、及はぬ筆もてしるさざるべし。されど、そは只天然の美をたゝふるのみにて、数多のつはもの共が、屍の山をつくり、血の流れを漲らせし、いにしへの戦場たることを、思ひ浮ぶる人ありやなしや。

よする仇波打かへさんとて、すさまじく挑み合ひしも、力及ばず、遂にむなしく、水泡と消えし、信義等の、後を吊ふ人もなく、あはれ、つはもの共の夢の跡のみ、こゝにのこりぬ。

激して岩に砕くる波の音は、恰も軍勢の吶喊の聲あくるごとく思はれ、颯々と梢を傳ふ松風は、鼓の音かと疑はれ、さら〳〵と濱荻のそよげるをきゝては、今なほ伏兵の起りやせんとあやしまる。

白く光れる砂、緑色こき松、山も水も、むかしの様に見ゆれども、屍山血河の俤はうせて、波の音松の風のみ、むかしを吊ひ良なるこそ、あはれなれ。

人　　越前敦賀港町久間方仝居　小川愛子

矢叫の聲地もゆらぎ、打合ふ劔の音空に響きて、闇に火花散らしたる修羅の街に、風まじり雨いたく降りて、鳴神の音とゞろ與と、耳さへふさぐばかりなるを、稲妻の影のあなとみるまに。魂はなきがらを

殘して、ながき恨を、黄泉の平坂の千引の岩の、千代にとゞめし、今川氏の末路ばかり、はかなきはなしと、昔みる度に、思ひしを、老たる松の木蔭に、石ぶみばかり、さすが、草にも埋れず、立てるをみれば、中々に哀も深くてなん。草刈の童が、折々供ふる花を、駿遠兩國の大守が、よになき手向と、受け給ふらんかとおもへば、誰かはせき袂をしぼらざる。若し義元朝臣にして、世を亂す賊臣なりせば、彼の高山の君ならねど、鞭打たましを。強きは弱をたふし、大は小を併する、戰國の世に、武運拙く、此所の土となり給ひし事を、しのび出つれば、松風の音も、假に吹きまさりし心地せられて、身にしむばかりなるに、遠寺の鐘も哀を副へて、塒に騒ぐ群鳥の聲も、昔を吊ふかと覺ゆ。

桶狹間昔の跡と訪ひ來れば
　夕日つめたき松風ぞ吹く

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

文永。弘安のむかし、蒙古賊數萬人、博多の海に軍艦をこぎつれて、皇國に寇せしことは、歷史をひらけば目の前にみるがごとくあれども、實地をさぐらん、と心あひの友二人三人ともなひて、九州鐵道の瀨高よりはしりぬ。ほどなく筑後川の鐵橋にいたる、この川上には、菊池武光が足利の數萬の軍を打はらひて、太刀をあらひし川流をも今にのこりて、身にしむばかりの風さへ車窓より吹きいりぬ、烟草くゆらしかたりあふまに、水城の堤にいたる。ここは蒙古を防禦せし跡にて、かしこは菊地武房の陣、むかひは竹崎季長が楯つきしところなるべしと、指さしながめやるうちに、博多につき、車を下り、今津。百道原。荒津のさきざき、隈なく殘なく尋ねめぐるに、夕日影。蒼海をてらし金瀾。眼をいければ、福慈子が、

神風のふきしむかしの船ならで
　波を夕日のいそめつるかな

とひそかに懷紙にかきつくるを、筑波子はとりもあへず、はしつ方に、

けふりふきこがれて走る黑艦に
　當時しのぶかげうかぶなり

としるしつるを、人にはみせじと、稍にたちて、涙のもくづとなしけるは、蒙古が當時のことを思ひ出てのわざならんか、あなをかし。

佐々さし子

軍とし云へば、露のきゆるを、あらそふが如く、命をなします、きいぬるこそ、悲しけれ。あはれ、海ゆかば草むすかばね、山ゆかば、水つくかばねとは、もののふの、君に盡すへき赤きこころを、とこしへに、つたふる言の葉なり。世のあさの如く乱れし當時は、いかならん、あまたの忠臣孝子は、多かた、一命をすて、あつぱれ忠義のまごころを、さゝげつらんも、かんばしき名の世に、顯はれず、む

なしく、草葉の露と消えぬるこそ、口惜しけれ。今尙ほ、片岡の杉の木立、あまた立ちならびたる、そが中に、石碑のありて、むかしの亡魂を、祭るあり。されど、香花をたむくる人もなく、いともさびしけなり。われもまた、淸水をだに、手向けばやと、雪ふみ分けて、塚のほとり近う、立ちよれば、かすかに、ひゞく、遠寺の鐘の音、一きはものすごく覺ゆるぞかし。

三谷起美子

幾百年のむかし、名たゝる楠正成公が、赤き心の一すぢに、をゝしくもみ國のかゞみの花と散りにし湊川よ、流るゝ水の淸き音は、今も昔の音に通ひて、大君のためみ國のため、二つなきいさをゝ立てられし、君がむかしの御名を傳へ、岸の松原・あらしにむせぶその聲は、いにしへ矢さけびの音かと聞え、花の香をながすその水は、つはものどもの淚かとも見え、にぎはふ岸の神戸市は、君がいさをの花かとも見えて、いらかなゝしき御社と共に、君がいさましきその御名は、千代萬代も盡くる時あらじな。

池田みさを子

今日は日ようなればとて、うなゐらの、朝まだきより起きいでゝ、いづこへか散歩せばやとそゝのかすにまかせ、川中島へといでむかひぬ。喜びて驅けめぐれる童が樣は、さながら花にたはむるゝこ蝶にも似ていとたのしく、遠、近、を指しては、こゝが雨宮の渡よ、かしこが西條山よと、うち語らひつゝ行く。身にかへて重き賴みをうけがひたる、上杉氏の義勇、さては愈に望みて事を誤らざる武田氏の沈毅、はた、其ますらをが、十年あまりの艱苦を經て、かたみにあだしのゝ露と命をあらそひし古の忍ばれては、千曲の河原になびく尾花は旗影か、松ふく風は鼓の音のそれならなくに、身にしむ心地せられ、いつしか我が足がきの止まりしをも得しらで、ひたすらにたけしをのたかきほまれを慕ふもかひなし。いでや、雄しげき世に生ひ出でし撫子、心のかぎり培かひて、皇國の武名を、醜の外國に輝かさばや。折しも、いづれよりか、我は謙信よ、汝は信玄よと、はらからの、いと逞しきはぎも、あらはに、いさましく興じ來りしも、いと〳〵末頼もしうてなむ。

西　艷子

神戸は五港の中にても、横濱につぎて、先、指を屈めらるゝも宜なる哉、東に大坂の繁華あり、西に須磨明石の景あり、されば、我邦人は更なり、外國人すら、來り住む者いと多く、隨ひて日に一日と開け行きて、港には、往歸る船の數知れず、陸には、美き家軒端を連れ、其賑へるさま、古の修羅の巷ともおぼえずかし。停車場より、ま直に、大路を行くこと一町ばかりにて、いと嚴しき社あり。是なん、古今世に類ひ無き忠臣、楠正成公を祭り奉れる、湊川神社にぞある。御垣の四方に、老松の繁りあひて、いよゝ神々しさを添へたり。先、神の御前に額きて伏し拜み、さて、かたへを見るに、美しき燈籠あり。そが臺石には、さる貴人の御詠といふなる、「たとるは同し武士の道」といふ歌、きざまれたり。其處より、左の方に行けば、一しほ松の繁れる中に、一つの石碑建てり。こゝは、稍靜にて、詣づる人の多くは大人なりき。軍服勇ましく、太刀佩きたる兵士、一人二人詣でゐたり。此の人達も、公と同じく、君の御爲國の爲、命も身をも捧げて、武士の道を、たどりつゝあるならんと思へば、そゞろに、尊く、なつかしき心地ぞする。仰き見れば、嗚呼忠臣楠氏之墓と、い

さ鮮かにきざまれたり。是なん、其かみ、德川光圀卿の、公が忠義を顯す爲、建てられたるものなり。あはれ、乱れに亂れたる世、やう〱治りぬと思ふまもなく、醜の賊共再び起りぬ。公は、能き謀有りしかども、用ひられず、敗ると知りつゝ、大君の命に背かず、此處に數多の賊と戰ひて、遂に失せられぬ。あはれ、公をして、今暫し世に在らしめは、醜の賊をして、いかで、勢を得しめんや。うらめしとも、うらめし。公は、君を思ひ國を思ひて、いかに心や殘されけん。今は戰ひ敗れぬと見ゑし時、ありしあばら舍に走り入りて、七度人と生れて賊を伐たばやとて、刃に伏し給ひぬとか。あはれ、其のあばら舍の在りしは何處ぞ、人ならば問はましものを、あはれ此の松、今はかく、仰くばかりなれど、其頃は、未だ、若木なりしならん。雨と降り來る賊の矢に、枝を折られし事もあらん。ふせぐ兵の太刀も、數多度ふれしならん。あはれ松吹く風は、長へに、公が操をうたひつゝ、かたへに匂ふ櫻の花の、ひら〱と散りたるも、公が死は、かくぞ有りけると、知らせ顏なり。御社を出て行くこと、一二町にして、湊川あり。されど、川とは名のみ、古の水底を、今は汽車の通路とぞなりぬる。公無くば、此の川も、世の變遷に隨ひて、名も形も失せたりしならん。さるを、水は涸れ、流れは絕ゑたれど、なほ湊川てふ名の、廣く世に、流れたるも、めでたし。我身、此の御社に詣づる事三度。されど、拙き文に、書き綴らんことの耻かしさに、其が記をも、ものせでやみぬ。さるに、此度、この題を得て、そゞろに、過ぎし日のこと思ひ出でられて、筆のまに〱、斯くは記しぬ。實に、由なき、物見遊山の閑あらば、古戰ひの跡を尋ねて、忠臣義士の志をしのび、女ながらも、敷島の大和心を、發はでやはあるべき。

中山さみ子

ひと日、心あへる、學びの友たち、二人三人、誘ひてこゝかしこ、そゞろ歩きに出でぬ。ふと古戰場に通りかゝりぬ。日頃、師の君の御口すさみし給ふ、楠の君の、いさをゝ立てられ、命をなしまず、勇ましくも、露ときゑ給ひし處にて、今は、あれにし野とはなりつれど樹にには、いにしへの、事のしるしを、のこし、いと勇しく見うけぬ。常に師の君の敎へ給ひし事ども、思ひ出でゝ、かたらふ折しも、日は、やゝ西にかたむきしに驚き、またもろともに、家路に歸りぬ。

中山ちか子

花さく春の朝、月のさやき秋の夜も、何となう勇しくも、又すさましきは、古戰場にぞありける。實にいにしへの、ますらをか、命をこめて、勇しく、大君の御爲、又、御國に盡すいさをしに、かばねはくちて、骨となり、刃はをれて霜結び、今はたなびく、瀨野とはなりつれど、思へはいにしへの有樣も、そゞろにしのばれてなん。

錦織さち子

千騎萬騎のつはものも、幾百艘の兵船も、あはれや夢のあとゝなりたま〱にこゝかしこの翁媼の昔物語となりつるこそ、果敢なけれ。爰はそもいつこ、そのかみ、源平のつはものゝ、矢さけびはげしく戰ひて、怒る荒波も、から紅と湧き返り、かはれは、磯邊に丘を築きしと、千歲の後も、なほ其の名は、殘りて、朽ちぬ、矢島潟、けにこゝの海底の藻屑となりし人は幾何、又こゝの磯馴松の露と恨みを吞みて、消ゑ果てし人も幾何。見渡せば、沖遠き白波も、皆滑ら

かなる岩巖も、青淵に、姿うつせる老松も、ありし昔のまゝなるに屍の丘も今は炊烟盛に、血しほの海は、白帆眞帆、風豊かに、大御代の、千代に八千代の歌聞かに、歌ふ舟人の聲も、長閑なり。ことさらに、春は、月かげの、おぼろにゝほひて、織る小波もしづかなり。思へば、淵瀬定めなき所やと、そゝろに古き事ども、思ひいでゝ、さゝめあへぬは双の袂の露なりけり。

星野菜香子

御國の爲め君の爲め捨てゝかひある命なりけりと、いさみにいさみ駒うちならべ、太刀ぬきかはし、互にまけじおくれじと、進み進みていさみ爭ひ、矢さけびの聲天地にとゞろき、さながら、山もくづれ、地も裂くるゝとうたがはるるばかりに、ためき戰ひしも、いつしかすまの浦波跡絶ねて、今も殘るは吹き下す嵐のみなりけり。いでや、そのかみ露と消ねにしもののふの、屍はくちて骨となり、刃はなれて霜を結び、いつしか跡とふ人さへ稀になり、石の文字さへ苔むして定かならねば、誰といふを知るよしなけれど、そゞろに昔しの忍ばれて、いと物すさまじく、吹きくる風さへ身にしみ渡り、鳥の聲さへ物かなしく、思はず涙を催しぬ。されど、その名はいともかむばしく、猶千載の後までも、朝日と共に輝きて、永く正史に跡をたれ、なさな子らの鏡とたゝへらるゝこそいみじけれ。

高砂き代子

我が県の戌亥の方、一里ばかりへだゝりて、桔梗原あり。こは古へ甲斐の城ぬし、武田晴信と、深志の城ぬし、小笠原長時と、兵を交へし所となん、聞き居つるを、一日、こゝに行きて、遊び見ばやと心がけしに、今日は、陰暦彌生の三日にて、天氣よく野べのけしきいとのどけし。折柄したしき友垣、とひ來りて、桔梗ヶ原に野遊、いかゞと、我をそゝのかしくれければ、我はいとうれしうて急ぎ仕度をとゝのへ、とく宿を立ち出でたり。やがて此の里を出ではつれ、是より亥の方に向ひ、細き野道をたどりつゝ、二十五町ばかり行けば、此の原になん至りぬ、此の端末だ開けもやらず、見渡す、かぎり、あれ野にて、老木の松並み立ち、かげもをぐらく生ひしげり、春の若草、目も青々と萌ね出で、空には雲雀の聲、うるはしく、いとものどけき野邊ながら、さりとて問ひくる、人稀に、あたりに、いふせき家、一二軒あるも、今は人も住み居らず、大方戸としはてたるにぞ、自から過し昔に、戰のありし亦共、忍はれて、霞む野末のこゝかしこ、白、紅に、吹き出てたる、桃の花は、風になびく、旗かと、見まがはれ、をりをり通ふ松風の音、又、かちときうたふつゞみの音かと、あやまたれ、あなたこなたにあれまさる野飼の駒のいなゝくこゑさも古への様と、思はるゝも、又一しほわびしかりけり、猶あたり見やれば、二三のふる塚あり。こは何なりと近より見れば、こは戰の共なりに、やいばのもとにみまかりし、幾百人の武士の、むくろを埋め祭りし、おくつきと、しるしあるにぞ、いとゞあはれもまさりきて、身もよだつばかりにて一しほ涙に袖ぬれけり、

今もなほむかしおぼえて夢といへとながめわびしききちかうの原かくいひつゝ、なほ是より、南のかたを巡り見んと、さまよひ、たどり行けば、はるかあなたの塚の上に、老いたる松の立てるにぞ、しばらくこゝにいこはんと、立ちより見れば、こは名にしおふ、桔梗ヶ原子養の松とて、むかしは、女木、男木の、二本ありしに、今

は一本かれてなし、偖てこは古へ、山本勘助といふ人、賊ありし、其なりふし、一歳にたらぬ、幼子を、この木に、捨ておかれしに、あやしくも、此の松より、乳おひ出で、幼子、こゝに日立ちて、成長せしとなん、あなあやしき事ぞかし、是によりてか、此の松の葉せんじてのめば、乳のいたつきいゆ、又いたう乳出づなど、古へより言ひ傳へ來つるを、今より、三十とせあまりの昔し、文久三とせの秋　孝明帝のひめみ子、和宮の尊、吾妻へ嫁らせ給へるなり、此の處をよきらせ給ひしに、其つき人のひめ君とも、都のつとにとて、さはに手折りければ、今ははや女木かれはてゝ、男木唯一本、過きし昔しのかたみとのこり、立てるも、又なかしき事なりけり。

須磨純子

すさまじかりし喊吶の聲は、たゞ松の音に殘り、骸は長く修羅の苦しみを受け、魂はなほこのわたりさまよひて、あと弔らふ人さへなければ、雨そぼふる夕べには、鬼火に燃ゆなどと、おうなの口に殘りて、絶ねて夜などは行く人もなく、いといといみじき所とのみ、里の童などの思へる、わりなしや。君を思ひ國を思ふ武士の志を得ずして、はかなくなりしあとなるを、など、そゞろに古をしのぶ心さゞめ難く、せめて古塚なりとも殘りたらむには、一すくひの水の心の手向もがな、とて、跡かけのをぐらきわたりに、やうやう、探しあたりて、見れば、苔いと深く、底にさへ埋れて、これか、あらぬか、さまごふばかりなるも、いといとあはれにて、

苔の下に埋れはてたるますらをの
むかしをかたるまつかぜのおと

塩いさむ子

翁、其のいへりけむ、夏草や武士共の夢の跡と。げに今は芝の枯生の間、荊棘灌木など、いやしみらに生ひ茂りて、ひたつゞきの野原を溜の溪木綿幾重なす、山立ち塞ね、谷深く、打遶りつる其奥に、昔を忍ぶ碑の、すさまじげなるたゞずまひ、其側に四本五本ばかりの若松が、淡竹幾幹、上つ枝しつ枝さし交へて、綠の色のうるはしく猶榮行くめるは、あはれ吉野の古戰場にあらずや。つらつら、思ひ廻らせば、五百年あまりの其昔、鳥が鳴く東の方より、ねぞの醜草いやしげく、天の下にし塞りて、天つ日嗣のみ惡の騒に潤ふ蒼生草を。惱ますのみか、畏くも、亦忠はしくも、久堅の、天つ日なるへ叢雲の、立ち散ふべくなりぬれば、遠つ御祖より、石の上、ふるく馴れにし宮居にも、一天萬乘の現し神、在すことさへなり難く、御心ならずもいたはしく、移りきませる芳野を、心にかけて、敷島の、日本魂備へたる、ますら武夫が、旭日に、匂や幽しき櫻木の、赤き心の一筋に、深く心を筑紫潟、浪とよせ來る賊軍を、拒き戰ひ退けて、叡慮を安じ奉りたる、其折にしも、鯨波の声、矢叫の音、あるは又、阿鼻叫喚の聲すごく、修羅の巷に血烟の、靉き籠り川となり、尸の山を築きたる、其凄まじき有樣は、今し形見の松が枝にそよぐ風にも偲ばれて、坐に涙せきとめあへず、胸ちぎるゝばかりなり。あはれや、まめにひたぶるに、仕へし人は、はかなくも、劍のしもに消ねぬとも、操正しき其心は、千年の松の色に出で、芳しき名は碑に、萬代迄も朽ちず經ぬべし。

佐久間八重子

街道には、程遠からぬ所ながら、小高く凹凸多き一面の廣野にして小草に打ちまじれる、去年の尾花の、其が中に苔むせる古塚の、長

けほどを初めとして、四つ五つ、あはれに立ならびてあれど、花手向け、香たく人も、絕ゑてなく、古き新しき、松の數もと、塚もりげに、立ちならび、御代ののどけさに何ゐつゝ。塚の主に似もやらず、緑の色も、一際深けれど、なきかはす鴉の聲もかなしく、何かうらむらんやうにて、何となく昔の忍ばれ、梢をならす松風も、攻め皷の音か、驕りの夢の琴の爪音を、聞くらん如く。又恨の魂の、面影の、そこら打ちめぐるやうにて、いさごうらさびしく、日影もいつか、入相の、鐘に心も細道の、そゞろ恐ろしくてなん。此所こそは、彼の駿遠參の大將たりし、今川義元が、小身小勢の、信長の螳螂の斧に、討ちよせられて、只一戰に打ちとられし、桶挾間にそありける。土地の人に事とへは、木の葉ちる、哀れの秋の雨そぼふる闇の夜などは、風に音なふ間の聲矢さけびの音、又鬼の啼く音も聞ゐて、鬼火さへ陰々と、燃ゐたつなど聞くも哀にしむすさまじさ、身の毛もよだつばかりなり。そは皆驕りの因果、夢のあと、勝ちて兜の緒を締めて、心の駒の手綱弛めずば、爭でか、負けをとるべきされはこそ、古の聖も、滿は損を招き、又驕りは天下の凶德也と、いひ誡かれけれ。などで、彼は守らざりしならむ、心なかりしか、將た、天運の然らしめしか、嗚呼恐ろべきは、驕りにぞありける。

賀屋壽子

聞ゐ上げたる言の葉、あへなく、せきとめらるゝや、義を山岳の重きに比し、死を鴻毛の輕きにおき、あたらますらをが、はかなくなりにける、湊川は、菊水の淸き流、千代に盡きせず、楠の芳名を、つたへ來て、代々の人の鏡となりにけり。まことなるかな、虎は死して皮を止め。人は死して名を止む。川の流はかぎりありとも、名のみ朽ちせぬ、勇士の高操、たれか慕ひ、たれか感涙にむせばざらんや。

小田中靜子

我が信州に、川中島と云ふ所あり。昔、上杉謙信と、武田信玄と、戰ひし所なり。妾、去年の秋、善光寺に詣でし時、歸途は、午後九時四十分發の、終列車に投じたり。折しも、神無月の望の夜頃、人心何となく沈み、秋風動きて紅葉飛び、白霜結び下雁聲悲切なり。月はあく迄さゐ渡り、悲しむが如く、歎くが如く。其昔、戈に斃れし、將卒男の亡き魂は、何處に、さまよふらんと、思はるゝに、草の根毎に、すだきて、機織る虫の音は、又一入の哀をぞ添へにけるあはれ、月は何所も同じきものを、此處ばかり、斯く悲しきも、理りせめて哀なり。年老い、父母に別れ、最愛の妻子を捨て、遠き軍に出で立ちて、空しく、鋒鏑の露と消ゐにけん、其人々、はた、子に先だたれし父、夫に殘されし、妻、其人々の心は、如何なりけんと思ひ廻ぐらすも、中々に淚にむせぶ業なりや。鞭聲肅々夜河を渡りけん。其川の邊は、鐵橋高架轟々と鳴らして、過ぎ、流星光底長蛇を逸しけん、其の川の瀨は、蛇瀧一噴煙を吐きて去る、汽車の窓中、今昔の感に堪へずてなん。

星野しん子

夕日は西に沈み、野寺の鐘は無常を告げ、うちつゞく山々の麓より、暮れゆくあれ野の風は身にしみて、虫の聲さへかれ〲に、うち見ゆる限り人の家もなし。こゝなん三十とせの昔、戰のありし處とて淋く心細きこと限なし。ゆくまゝに、道の邊の叢の中に、しろきもの見ゆ。たちよりて見れば、一つの髑髏なりけり。あなあはれ、いつ

この女房の夢の中の人がかくともしらで、ある夕にまちわたりにけんそのかみ、世のみだれにしころは、千萬のますら雄のともが、義を重んじ命をかろんじ、鬨の聲に河も湧きかへり、砲筒の音に山もさけなんばかり戰ひしも、今は波風もをさまりて、昔のあとをとふ人もなきにや、苔むす石文はたてれど、香花を手向くるけしきだになし。三日月の影はくらく、尾花が袖はやれはてゝ、さらでだにぬれまさりぬる旅の袂は、分け行く草の露はしとゞになりて、急ぎ行けばなき人のさまよふ魂か、あやしき火の光りの見ゆるに、梟の叫ふはいかるが如く、狐の鳴く聲は嘲るに似たり。あゝ、われをさなきより讀みにし文に、こゝの戰を知れり。想ふに、兩大將が、百萬の兵をもきゐて、山川のさかしきによる、鋒の光りは旭にきらめき、旗のひるがへるは雲にまかせ、その勢、さながら虎の嘯を負ひ、龍の淵に蟠るが如く、天が下には鬼神もいむがふましくやありけん、しかるに物がはり星うつりては、敵も味方秋風にきほひもて散れうせ、むかのかたみとて殘るは、只路の中なる髑髏のみなり。あないたはし、なき人のあと弔はんと思へば月もかたふきて、道はくらし、昔ながらにきこゆるものとては、峯の松風の川瀬の音にたちまさるのみなり。

奈賀井　滿梨子

置く露ふかき茂くさむらのおくつきは、其埋れししかばねは、切死したる人、あるは矢にあたりてはてしものならむ。されし骸は、いよ〳〵打ち果てゝ、人が思か、はた敵か味方かもわかち得ず、只白き骨のみ、此世のかたみとのこりて、草葉のかげにさまよふ。あはれ。むかしのますらたけをの魂は、今やいづ地にさまよふらむ。思ひまはせば、其むかし、西に東に、はた南に北に、野山のわかちなく、あまたのいくさ人が、とび來る火箭は、篠つく雨の如く、打合ふ刃は、天てらす日にかゞやきて、電光の光るが如く見ゆ。まるだ、事ともせず、そが中に入りて、命のあらんかぎり、きりつ、切られつ、龍のごとく虎の如くたゝかひて、はては、血を路草にそゝぎ、屍を野原にさらす、いかにものゝふの習とはいへ、いといたましきことにこそ。風になびく旗すゝき、草葉にすだく虫の聲にも、ありし昔をおぼゆる心地なんせらるゝを、折にふれて吹きわたる松風のすさまじきは、天地もどよむべき矢さけびの音、はたときの聲のひゞきかと聞ゐて、いとゞ哀れのさしまさるになむ。

大友　倫子

春未た淺けれど、海の面は淡霞こめつゝ、いと面白き景色なるに、彼の島こそ、昔しは鷹島と云ひしなれ。かしこゝそ、蒙古の耳塚のあるほとりならめと、霞める中をたど〳〵しく指しつゝ、ふと思ひ出づれは、けに此ほとりは、七百年の昔、白きはまの眞砂も、青みわたる海原も、血しほの赤に染めなして、日本國のほまれを輝しけん、生きのこりし三人のものこそ死ぬるにまさる恥を殘りけめ、我ものゝふも、大君のためには、身をなきものにしていそしみけんを、世は飛鳥の川のふちせにもまして、此頃は、烟たく火輪船の笛の聲絶ねず、小さきたなゝし小船の行き通ひ繁し、外國の商ひ品、日々に出入するこそ、變れは變るものよと、ひとりごつに、いつしか西山の端に、夕月の哀れに出でしに、折しも遙か彼方に、童等が。「殘るは只三人、いつしか雲はれて、玄界洋月清し」と、謡ふ聲の、さけやきも、亦春ながら哀に聞ゐけり。

岡澤のぶ子

霞かすめる村より、十町はかりへたてゝ、さゝやかなる閣あり。木立茂りて、ひるさへあやしの鳥の鳴きけるを、夜に入りて、雨そほふる時なさは、青き火の、木の間にほのめくよしいふめるに、いかなれは、かくおさろ／＼しき事になりもて行きぬるにかと、有そくの人に問へは、昔し、何かしの將監といひしか、主の爲めに、此の小城守りけるに、いさいたくせめたてられて、援ひ求めしに、根城よりは數千の兵つかはしゝに、間に合はすて、はしなくも攻め落されて、討ち死にしけれは、其を恨みてか、今の世まて、怪しき事多くありさのたまふ。いさなかしや、かゝる、君に忠なる人の、後の事なき人に、くさ／＼のわさなすへき心もたらんやさ云へは、いきさほらんはかりにうちけちて、聞き入れ給はす、けにさる事もあるにや。

●女鑑月並歌文兼題

四月廿日　歌……蝶戲花　／　文……試驗及第を祝す　四月十日〆切

五月五日　歌……朝顏　／　文……汐干狩の記　四月廿五日〆切

歌文原稿、〆切期日までに本社に到着せざるものは、すべて没書とす。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

題　住所　姓名
……………………
……………………
……………………

文書式

用紙は半紙二つ折の事。字體は詳明に記し、句讀點を施すべし。

題　住所　姓名
……、……、……。……、……。
……。……、……、……。……、
……、……、……、……、……。

總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離て認むべし。書式に違ひたるはすべて没書とす。

○婦人は何人にても投稿隨意たるべし。

うつはものをまうく、すべて此道すぢに、寺院の軒をならべ、石垣をたゝみていかめしく造られたり、新宮よりはるかにあゆみて、かんまんが淵といふあり、清瀧といふは御宮より南のかたへ一里ばかりゆきて寺あり、觀音薩埵の鎮座にして關東巡禮の札所也、偖も中禪寺は崢嶸たる山道を四五里ばかり攀ち登るといへど、老のあゆみかなひがたくて、遙拜してやみぬ、黒髪山は代々の集に入りたる名所なれどもだし得ずして

秋ふかき峯のもみぢ葉たつた姫くろ髪やまのかざしとそ見る

巡禮なほあきたらず思ひながら、雨ふり出で風ひやゝかなれど、老をいたはりて下向し、院主の物がたりを聞くに、當山のむかし二荒山と名づくるは、人王四十八代稱德天皇の御宇、神護景雲年中に、大巳貴尊、健御名方命、二神出現ましませしを、本宮新宮とあがめたてまつるに、二神ともに荒神にて、春秋の二時にかならず雨風あらましきゆゑに、かく名つけ侍とかや、偖開山勝道上人、神護景雲より天應年中まで、三度攀躋をくはだてゝ、つひに神宮寺を建立したまひ、そのゝち弘法大師登山ありて荒神をしづめ奉り、山の名をも日光とあらためられしとぞ、なほくはしき事は、性靈集、ならびに補陀落山紀、元亨釋書などに見ゆはべり、むかしは眞言の道場なりしを、ちか比慈眼大師の中興より、天臺の法燈をかゝぐ、御領はおよそ一萬石、郎徒二十人、一坊八十人、社家、樂人

よりはじめ、諸司のそなへまことに嚴重の御崇敬なり、御宮の額は、かけまくもかしこき　後陽成院　後水尾院の勅筆あざやかにをがまれたまふなど、なに〻れとたふとき物語どもいとおほけれど、おろかなる心には十にひとつをも覺え侍らず、琉球よりたてまつれる燈籠、朝鮮よりまゐらせたる法鐘は、更にたぐひなくいとめづらかなる事になん、鐘の銘はすなはち朝鮮人の作なり、院主にたのみきこえて是をうつす、

日光山鐘銘並序

日光道場爲
東照大權現設也
大權現有無量功徳、合有無量崇奉、結構之雄世未曾
有、繼述之孝益彰
先烈、我
王聞而歡喜、爲鑄法鐘以補
靈山三寶之供、仍命臣植
敍而銘之、銘云

丕顯英烈肇闢靈異玄都式
廓寶鏞斯陳參修勝緣資薦
冥福鯨音獅吼昏覺魔伏非
器之重唯孝之則龍天是護
鴻祚偕極

朝鮮國禮曹參判李植撰

片司直吳竣書

崇禎壬午十月日

また、過し慶安元年四月十七日は三十三廻の神忌にあたれり、當山にて御八講おこなはるべきよしみことのり有りて、月卿雲客あまた下向し給ひし時、御寶殿の御戸帳の錦の織物の紋に　後水尾院のよませ給ひたる御製をも寫し侍りぬ、此御製を心しづかに讀みときて見侍れど、めぐりには東照の宮三十三廻忌をとふらふ歌とありて、中に藥師佛の名號七遍をかぞへて、和歌はすべて十六首によまれ侍り、誠に霜のたて露のぬきはたはりひろくおりなさせ給ふにしきの御心を、神鑒さぞかしこくや見そなはし給ふめりと、たふとさのあまり、そゞろになみだぐまれ侍りぬ。

十六日　宿坊を出て、はじめの道すがら、なほこまやかに問ひきゝて、十八日の暮かたに水戸に歸りつきぬ。

廿二日　西山殿より爲誠か許へ御文給はる、此比の秋興にふけりて、德田、君田の里々を通らせ給ふに、山の紅葉盛りにして龍田山の梢よりも染めまさりたらんやうにれもはす、あはれ都人の見はやし侍らむ、山姫のぬいはくになどかゝせ給ふによりて、かれこれにふれさそひて明日もみぢがりにともよはす、殿は磯原といふ海つらに待ちれはすべしとぞ。

廿三日　常磐阿闍梨（白心軒）宿賀法師（神先寺）咏禪、爲誠、行正、爲明、定輔などともなひて那珂川をわたり、青柳村より太田の郷にいたり、さとの宮といふ村を過るに薩都の神社あり、神名帳にものせられて、いとふるき御社也、町屋村を過て右の方に瀧あり、これなん玉たれの瀧と名に流れたるよしを聞て見るに、のぼらんといひてのぼりて見るに、白絹に岩をつゝめるやうなるさま、いとたぐひなく見ゆ、此山にある寺を玉簾寺と名づく、正宗寺の末寺禪宗也、れの〳〵、からうた、やまと詞れはき中に、予も、

　いさきよくれち瀨つせの玉たれをまきわけ出る水のしら波

村々をへてたぞがれ過るほどに大中村につきぬ、此所の富人織部といふか家をあさ

りの宿に、その弟某が家をみづからがやどりにあてられぬるよしいひて、なにくれと待ちまうけて、夜ふくるまでけふの道すがらの秋色をかたるに主の織部、もみぢをわしてに蒔たる盃をもち出て、みさかなに何よけんなどゝてなせど、その盃織部にさして色よくなりしかど、たはぶれて、

　さかづきは紅葉の色のわりへかな

といへば、皆わらひのゝしりて酒たけなはになりぬ。

廿四日　大中を出て、小中、小妻をすぎ、徳田村にいたる、此所の郷士大森彦五衛門途中まで出むかへて、中納言殿より此山のもみぢ見せ申すべきよし命せられ侍るまゝ私亭へたちいらせ給ふべきなどいひて、あないしつゝしばらく休息しぬ、あるじまうけ心やりてわろそかならず、此亭よりゐながら山々の紅葉を見て歌書きつく、

　もみぢ葉はこゝをせにせん露しくれそめて色こき徳田山かな

また、發句、

　染にけり紅葉むらこの木々の末

それより里川村にいたれるこゝの郷士遊見茜右衛門出迎て、さきの大森がいひしやうにのべて、わりなく肩輿をかれか亭へみちびきて、又ねんごろにもてなしつゝ歌もよはす、

嵐ふくみねの紅葉をせきとめてからくれなゐをさらす里川

君田村にいたる比、さとうち時雨しかも、

時雨する空もいとはす山いく重こゑてき見田の里のもみち葉

こよひは横川村にとまる、ともし火をかゝけてきのふけふの日記をかいつく。

廿五日　よこ川を出て取あけ坂といふさかしき山をはる〳〵とこゑつゝ峠にのぼれも、蒼海まなこの下にたゝへて白波空にひゝけり、島間應有國波外恐無天といふふることを吟してしもらく眺望す、その坂をまたはる〳〵とくたりて、大塚、湯薬、木皿の里々を過て、磯原の濱につきぬ、御旅館ちかき家に休所をあてられて餉たまはりつゝなは日かげたかけれも、名にしれふ莫來關見にまかるべきよし仰せらるゝまゝ、人々いざなひて出てゆくに、右の方は海ちかくてあら磯なみ耳をれどろかしつゝいとかまびすし、神岡、粟野などいふ村をすき莫來の山をのぼる、峠に岩きりとほす事五六十間もやあるらん、高さは四五丈斗、ひろさは荷掛駄一疋のかよふほどにて、上はなはせもく、わつかに二尺もかりと見ゑたり、ふりあふきて空を見れも、碧天ほそく見ゑて、さながら青流の大空流るゝなどもいひつべし、たの〳〵懐なる硯とり出て、岩打拂ひて歌かいつくるに、御閣梨は先年もこゝを見侍りつとて、

命あれは二度こゆつみちのくのなこその關の名には逢ひて　阿闍梨常覺
こゝにまつ勿來の關をすゑ置て人まつ島の名はかひもなし　法印宥賀
老の身はなこその關ときく〳〵も越こそ見つれ都かたりに　安藤定爲
陸奥の野わけ山わけわかなくに誰かなこその關といふらん　市川味禪
浦風の磯山かけてふくころは波もなこそのせきの名なれや　安藤爲誠
こゝつらやなこそときけと見る人の心をとむる關の波かせ　肥田行正
なこそ山もる人もなき關の名に心をとめてこゆそわつらふ　安藤爲明
治まれる君が御國ぞさかもなき人はなこその關ととめよかし　安藤定輔

元祿十年九月廿六日同遊八人と書きつけたり、歌のよしあしはともあれかくまれ、名所にあそびてむなしからざるを、ふる里人にかたらまほしくて寫し入侍りぬ、關山よりれりて濱をたにあそぶ、みちのくの大洋渺々として目ちかにかゝる島山もなし、まさこの上にむれゐて思ひやれを、かぎりなく遠くも來にけるかなと、いとものわびしく、彼河内守親行が鎌倉に逗留して、蘇武が漢をわかれし十九年の旅のうれひ、李陵が胡に入し三千里の道の思ひと書けんも思ひ出で、しきりに羈旅の情れこり、ようせずを涙も落ぬべきこゝろはひ也、

ふる里の人に見せはやみちのくのあら磯なみにぬるゝたもとを
と打ぎんじながら、つら〳〵思ひ返せど、その親行はさだめて不如意の心ありてこそなん書もれきけめ、此翁はなにゝ不満のうれひもなく、ことにこたみの旅行は、天か下に御三家とひゞきわたらせ給ふ殿の御もてなしのこよなきに、子甥の介抱むつましく、あさりよりはじめ、みなよそならぬ人なり、あはれ翁ほど果報いみ敷人もあらじかし、さるに此ものわびは、なでうはれ〳〵しき心なりや、是も七そぢといふひがものゝわざなるべし、但し胡馬の北風にいはひ、越鳥の南枝にすくふとか、鳥獣すら懐土の情あり、まいて人倫として故園をおもはざらんやなど打つぶやけど、皆笑ひあへり、是より岩城へは五六里程、海ぞたの砂路、なみたゝわしもとに打よせて、いとおもしろき旅路なるべし、小那の濱とやらんもちかく見渡さる、右の方へおもむきて、九面（コヽツラ）の濱へ行くみちはなはださかしうして、おの〳〵馬のりものよりおりてよぢのぼりぬ、九面（コヽツラ）より平方の濱へ出る道に岩を切ぬきたる洞道あり、かの久昌寺の洞のごとし、此平方は、仙臺より江戸へ運送の舟つきなれど、富商の家々海にのぞみ山にかけ作りていとにぎ〳〵しく見ゆ、大津の濱も平方におとらず、こゝは水戸の御領なりとぞ、されどにや、此所の郷士（西丸金右衛門）出むかへ、客亭をひらきて晩飯すゝむべきなどいへど、すでに夕陽

かたふきぬれといそぎてまかり出ではべりぬ、又もとの眞砂路をとほりて、黄昏に磯原の宿に歸る、殿の待ちれはしますとつぐれど、やがて御旅館へまゐる、御物がたりのついでに、此比の紅葉はいかゞ見侍りつなどとはせ玉ふをりに、

たくひやはあらしの先にたつねきてれもふまゝにも見しもみちかな

やゝありて、夜のれもの、酒肴さまぐ\にして夜半に及びぬれど、御いとま申してまかで侍るに、あすのかへさの道すがらを見せ侍るべきよし子甥に命し玉ふ、こよひ磯原の泊りみとたなれと浪の音ひゞきていとゞ老のめさめがち也、

よもすからいねもやられす磯原やあらきなみたゝこゝもとにして

廿六日　磯原を出て上手綱村の長宏寺（本尊觀世音日菴和尚開基禪宗）能仁寺（本尊上同慈覺大師建立天台宗）下手綱村の大高寺（本尊不動德溢草創眞言宗）などを順禮し、里々を過て、濱どたにゐて柏槇山を見侍るに、浪打きは白砂の中に大なる、岩あり、その岩の上に一本の柏槇枝より根を生し根よりさらに枝を生し、はひゝろごりて岩をとりまき、周廻十里どかりの山をなせり、柏槇のわだかまりたるさま龍のごとく、うづくまりたるいきほひ虎に似たり、或は枝たれて船のかたち、梢高うして塔のすがたに見ゆ、人工をからすして天然の奇形は、まことに希有の見もの也、又それより川尻の濱など過て桀藏小屋といふ島山を見侍る、此島

むかしは田尻村の山につゞきたりしが、あらき浪風にいつとなくくづれたえて、おのづから島となれりとぞ、西山殿の好事にて、こなたの峯より橋をかけてわたりかよふに、橋の下四五丈もやあるらん、蒼波たゞへていとすさまじく、もゝふるひあならうらしゝまるこゝちぞする、島はみな岩ほにしてまはり六七町もやあるべき、數百本の松盤風においさらほひつゝ、いと見どころおほし、荒海の高しほは山のくづるゝごとくにおそひかゝりて魂もけぬへきやうに覺ゆ、いつの比にか有けん、榮藏といふ法師此島に小屋を立ておこなひゐたるより、則榮藏小屋と申す名を得たりとぞ、此所の童謡に、「大田尻ころもはなきかはだか島おきふく風は身にはしまぬか」といひならはし侍るとかたるを聞て、島にかはりて返歌し侍らんとて、

あさな夕な浪のぬれ衣きるものをはたか島とはなに名つくらん

此島のあたりより日も暮かたに及びぬれど、今宵は滑川といふ村にとまる。

廿七日　相(スケ)川、守山などいふ里々をこえつゝくれど、此國にも、みかの原、泉川といふ所ありげにも名寄に、他國同名の名所どもおほく見え侍れど、かならずしも、かしこの名をこゝにぬすみもちゆるにもあらざるべし、いづこにもあれ、古人の詠に入て名を傳ふるなんその所の幸といふべし、泉のわき出る所にしばしやすらふほど、

たつねきてけふ見かの原泉川名になかれたるあさ瀨きよしも

久慈の濱をひだりに見て舟渡しをこゑ、北河原村を過ぎ、村松山日高寺に參詣す、此寺は弘仁年中弘法大師の開基、本尊虛空藏菩薩は關東第一の靈佛にして、貴賤の巡禮たゆる事なしとぞ、山はみな白砂にしてまどゆき程なるに、松のみどり靑みわたりつゝ、たぐひすくなき勝景なり、かなたこなたねん比に見めぐり侍るを、わかき人々もどかしとや思ふらん、いざかしといそがしもよほし侍れど、

いそかしよ名さへ日高の寺なれどかへさの道も暮しとそれもふ

正木か浦といふは海につゞきたる湖水なり、山めぐり水ひろうして、繪にうつす共筆もれよぶまじき絕景になん、折しも山のもみぢ散りうかびて、水のみどりにはゑわるけしき、靑地の錦などいふべし、

又たくひあらしの木の葉ちりしきてにしきをあらふ浦の夕波

など口すさみつゝ、日の暮れざるさきにと、道をいそぎてやう〳〵一毛坂をくだれど、水戸の府城見わたされていとうれし、水戸もしどらくの旅宿なるものをいつしか冬になりては故鄕よりも寒氣はなはだしきゆゑにや、寒邪にあたりて目まひ鼻すゝりがちなるも、思へど七旬にすぎて似合しからぬ長旅に勞したるなるべし、ひたすら爐

をかこみて、座禪讀誦の外はなすわざもなく、かつ西山より召あるにもまゐらねど、まいてそこらありきあそぶ事もせず、たゞ冬ごもりてのみあかし暮しぬ。白井信胤より、年もかへりなむ一言せまほしゝとて、發句の所望しきりなるに、さのみいなびかたくて、かの日本武の尊の筑波を越ゑていく夜かねたるとあそばせしは、此國の名所といひ、しかも連歌の元始なれど、さいはひにれもひとりて、

筑波山こゑていく日か春霞

あら玉の年立かへりぬれど、いつしかと空のけしきものどやかに、松たてわたしたる大路のきよらなるに、府中の諸士、布衣、素襖、あるひは長袴、半袴など、各品格をまもりつゝ馬鞍のかざりまでも、心々にいどみみがきて、賀禮をのべありき、いとにぎはしき𪜈のよそほひなり、いはゆる俗しもにうるはしきも風かみにたゞしき府君の御德によれる成るべし。

東路や國の名にあふひたち帶よろづ代かけていはふ𪜈かな

常陸帯一帖者朴翁一傳居士（前内匠頭安藤定爲入道）東行日記也其文章麗其歌句巧眞可諷頑古人

予訪翁寓居得披覽奇玩驚目賞心無倦因染禿毫跋其後云

元祿戊寅季春初六　　休山叟書

元祿戊寅春於常陽久慈郡幡村旌櫻寺裏愛花且送安藤一傳居士歸舊里餞別之詩歌

花下惜別　　住持　宗要

忽迎高駕照蓬篳爛熳櫻花一片心惜別通霄宜秉燭恩風無限恩情深

同　　同弟子壬藏主　宗壬

櫻花遠招洛陽賓千紫萬紅色轉新唯恨君今頻報別遊宴此去又何春

同　　井上　玄桐

稠蘂堆雲照彩霞停盃話別日西斜逢人若問常陽事第一當須說此花

同　　人見新三郎　野苡

旌櫻樹下一樽開風送清香入酒杯幡屈橫庭映斜日花邊却恨別情催

同　　大久保　與九郎

佳木著芳幽寺前枝頭雪滿與猶鮮吟來堪恨白櫻影高客添輝薄暮天

同　西山

告別花前情益傷離愁欲忘屢揚觴清香滿襯錦衣色春餞行人歸故鄉　歸願寺　衆循

いとゝさへわかれぬ思ひを山櫻花もわかれを人にをしまむ　安藤朴翁　一傳

歸るべき道もわすれす旅衣名殘ををもふ花の木のもと　安藤主殿　爲誠

めくりこん春にそ契る思出を行くもとまるも花に殘して　安藤新助　爲明

旅衣たち行人をしはしとて花のものいふ木陰ともかな　安藤木工進　定輔

名殘あれや庭白妙の花盛り見すてゝ歸るけふのわかれは　馬場左五右衛門　高道

くる春の花のなかめを幾度か別れぬさきに契る木のもと　鈴木　宗與

別るゝも花の木陰にまとゐして家路いそくなけふのまれ人
梅澤久太夫　音安

別れ路の猶そをしけれ木のもとの花に數そふけふの名殘は
岡山二郎助　敬勝

別るゝも春はきまさむ木の下の花のまとゐは名殘わすれす
狩野文八　春可

花にあかぬ心より猶わかれ行く人の名殘もをしき木のもと
沼田武助　之盛

更に猶別れそをしきまれ人のけふのまとゐの花になるれは

びたちれひ終

國光社出版圖書目錄

孝明天皇御遺德

全一册

定價金二十五錢
郵稅金四錢

此書は先帝の逸事遺聞を網羅したるものにして先づ●御一代の章を掲げ編年體を以て御降誕より崩御に至るまでの事迹を示し尚●聰明●夙成●慷慨●孤憤●撫御●豁達●忍耐●仁愛●雜事の諸項に詳叙し以て先帝の聖德を頌し奉る國民として必讀すべき良書なり

文科大學敎授兼陸軍敎授從六位内藤恥叟先生序
文科大學敎授從五位栗田寛先生著

天朝正學

全一册

定價金三十五錢
郵稅金四錢

本書は皇道の淵源より水戸烈義二公が闡明の功業を述べ大に二公の本志の在る所を明にし世人をして本末を明にし學ぶ所を知らしむ

題辭東久世伯、勝伯●序文松方伯、品川子、野村子、渡邊子、川田男、富田、金子、平田の諸氏
獨逸國大博士ウヰルヘム、ロッシエル氏著
子爵品川彌二郎君校閲
平田東助君、平塚定次郎君、武内常太郎君、湯川寛吉君、共譯

商工經濟論

再版

全二册

定價金二圓六十錢（上編金一圓四十錢 下編金一圓二十錢）
郵稅 第四種郵便送り金三十八錢 小包郵便送り●十里迄九錢●百里迄十六錢●百里以外廿二錢

ロッシエル先生の經濟學に於ける固より天下の定評あり敢て贅言を要せず本書上下二編二千頁に及ぶ大部のものにして其全文飜譯の精到なる一字を漏省せし處なし戰後の經濟に處して大に商工業發達進歩の點に心を致し力を盡くさんとするの君子此書を讀まずして何の書をか讀まむ

國光社出版圖書目錄

品川彌二郎、平田東助合著

信用組合提要

商業家の道德を進むるは商業の發達を計る所以の基本なり信用組合は今後殖産興業の上に於いて大に普及せしめざるべからず信用薄弱なる商工業は完全なる結果を收むること甚難し是兩氏が此書を著されたる主旨なり商工業發達進歩の心を致し力を盡くさんとする諸士の樞要の書なり

全一册　定價金五錢　郵税金二錢

副島伯題辭●富田鐵之助君序文
文學士濱田健次郎君校閲●岡勇次郎君著

日本米穀之將來
及米價變動の源因

本書は内外經濟社會の參考となるべきは勿論農商業者必携の良書にして米穀需用供給增減の理由價格の變動及び既に來りつゝある現象將に來らんとする現象等一讀知悉するを得べし

全一册　定價金三十錢　郵税金六錢

三輪田眞佐子著

女子の本分

第七版

本書は●總論●女德●女子特別の身分●女子の藝業●女子の容裝●女子の人に接する道●女子の生活及人物●結論の八章に大別し尚之れを百十余項に別ちて女子の本分を盡くすに樞要の事項を詳叙せり今や第七版を發行す本書の如何に有益なるかは世間既に定評あり敢て贅言せず

全一册　定價金二十五錢　郵税金六錢

生田目經德編

標註 雅文消息集

全一册　定價金二十五錢　郵税金四錢

本書は專ら心を用ゐて古人の消息文中より高尚にして雅馴なるものを採り春、夏、秋、冬、雜の各部に分

國光社出版圖書目錄

三輪田眞佐子著

女子處世論

第四版

菊版美本　全一册

定價金二十錢
郵税金四錢

本書は『女子の本分』の續編として大に好評を博せり今や茲に第四版を發行す未だ見ざる人至急繙て以て其如何に良書なるかを知られんことを

●定期刊行雜誌之部

國光
毎月一回　十五日發行

定價	一册　金十三錢　●六册(半ケ年分)金七十五錢　●十二册(一ケ年分)金一圓五十錢
郵税	一册に付金一錢五厘
廣告料	五號活字二十七字詰　一行　金二十錢

女鑑
毎月二回　五日　廿日　發行

定價	一册　金十錢　●六册(三ケ月分)金五十五錢　●十二册(半ケ年分)金一圓
	全國無遞送料
廣告料	五號活字二十三字詰　一行　金二十錢

國光叢誌
毎月一回　一日發行

定價	一册　金五錢五厘　●六册(半ケ年分)金三十錢　●十二册(一ケ年分)金六十錢
	全國無遞送料
廣告料	五號活字二十三字詰　一行　金二十錢

國光社出版圖書目錄

第七版

三輪田眞佐子著

女子の本分　全

定價金二十五錢
郵稅金六錢

本邦固有の道德に基きて、我か國の婦女が盡すべき本分を明にせるもの、之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす。本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは、世間既に定評あり。敢て贅せず。再版三版忽ちにして賣り盡し、四版五版猶需要を充すに足らず、從て出れば從て盡き、諸孃が一日千秋を以て待ち給ひし第七版は今や漸く其成を告ぐ。購求せんとする諸子は、此の際至急申込まるべし。所載極めて廣大、試に其の目次を示さん、

目次

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

（電話本局八八）

國光社出版圖書目錄

獨逸國大博士ウヰルヘルム、ロッシエル氏著
子爵品川彌二郎君校閲●平田東助君、平塚定次郎君、武内常太郎君、勝川寛吉君共譯

商工經濟論

三版

全二冊定價　上編金一圓四十錢　下編金一圓二十錢

●郵税　第四種郵便送り二冊金三十八錢小包郵便送り十里迄九錢●百里迄十六錢●百里外二十錢

ロッシエル氏の經濟學に於ける固より天下の定評あり先に**全國實業家**並に**學者の渴望**に副はむが爲に本社出版の成を告るや直に初版再版を賣盡し今や**三版發賣**するに至れり本書**上下二編一千頁**に及ぶ大部の者にして其全文飜譯の精到なる一字を漏省せし處なし今日の經濟界に處して大に**商工業の發達進歩**に心を致し力を盡さんとするの君子**此書を讀**まずして何の書をか讀まむ

子爵品川彌二郎君、平田東助君合著

信用組合提要

全一冊

●●定價金五錢●郵税金二錢●郵券代用一割増

稟告

一本社出版物御購求の方は代價は必ず前金御拂込可被下候領金の順序に依り送本致可候

一郵便爲替にて御送金の節は拂渡局は東京新富町郵便取扱所にして受取人は東京々橋區築地二丁目國光社宛に御取組可被下候又通運會社早達便にて御送金の節は府下配達賃共必ず御拂濟可被下候

一郵便切手を以て代金に換用せらるゝ時は一割増に申受候

一本社へ御問合せの節は必返信料御添附可被下候然らざれば返信不仕候

一書籍雜誌御買上の方に對し別に代金受取證を差出し不申候間御注文品到着を以て入金の證と御認め被下度若領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附可被下候

一本社に御文通相成方は住處姓名等可成明瞭に御認め被下度候然らざれば往々行違を生じ相互の不便免れ難く候

一未納稅の來書は一切受取不申候

東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號本局八八）

發行所 國光社

伯爵佐野常民君題字　子爵松平乘承君序文
子爵品川彌二郎君題字　華族女學校幹事淺岡一君序文

藤井玄溟著

明治の女傑 慈善の泰斗 瓜生岩 完

瓜生岩女肖像入

定價金貳拾錢郵税四錢 ● 郵劵代用一割增

我邦古來堅操烈節を以て其名傳はりし婦人鮮からす然れとも未た世道の爲め郷國の爲め其身を犠牲に供せしもの有るを聞かす思はさりき聖代に方り福島縣下に稀有の女傑出てんとは請ふ天下の人刮目一番以て斯の編を見よ其の畢生七十年間の爲す所仁ならさるなし言ふ所慈ならさるなし是を以て暴漢至れは暴漢屈し嬰兒慕ひ猛獸能く馴服し上は九重の叡感を忝うするに至る是れ畢竟至誠内に充ち德風外に溢るゝに非すんは誰か斯の如くならん嗚呼道義地を拂ひ利慾交々競ふ今の時一たひ之を繙かは必すや懦心振ふへし私心掃ふへし多涙多血の志士淑女何そ其偉蹟を尋ね以て聖代慈善の泰斗たる斯の女傑に接せさる

發行所　東京々橋區築地二丁目廿一番地　日本赤十字發行所

ちくさの華　二

大日本女學會

總裁 小松宮妃殿下　副總裁 鍋島侯爵夫人

●本會贊成員は有栖川宮大妃殿下華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方九十四名

趣旨 本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむかため女學の講義録を發行し入學すへきな學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居なからに通信教授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇到を旨とし實踐の用に應し輕佻の風を避け以て賢良貞淑の品性を涵養せむことを期すされは此講義録は學ぶべきよすがなき者の師友となり一家の主婦として齊家保育の任に當れる者の指針となり女學校に入學し居る者にも參考書として適當なり●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を經りたれは今や新に學科を增し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に

會員を募集す

志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第一卷より送本差支なし●本會講義録は女學講義と稱し畏くも　皇后陛下叡覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一卷の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にして每月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す●會費一箇月參拾錢東修參十錢●會則希望者は郵劵貳錢を添て申込あれ

學科及講師

●修身(女子修身談)細川華族女學校長が從來同校に於て教演說せられたる者に係る(禮法)依方女子高等師範學校教諭●國語(國文)關根學習院教授(作歌)大口御歌所錄事(作文文法)今泉城北中學校長●漢文、土屋華族女學校教授●歷史(日本歷史、萬國歷史)大森文學士●地理(日本地理、萬國地理)喜田文學士(地文)脇水理學士●理科(物理化學)近藤工學士(博物)石川理學博士「生理衛生」未定●家事(家庭教育)三輪田高等女學校講師(家事經濟)後閑女子高等師範學校教諭(家事衛生)三宅醫學博士(小兒衛生)三島醫學士●割烹、御園華族女學校教員●小兒心理學、下田文學士●裁縫、渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校教授●音樂「未定」●手藝(活花點[illegible]茶)田邊東京女學館講師[illegible]●[illegible]大家●お伽譚、漣山人●史談、下田華族女學校學監●小說、逍遙學海紅葉三●詞藻●質問應答雜報雜錄

●目下第五卷迄發行せり

東京市麴町區土手三番町二十八番地
大日本女學會

寄附金第一回報告

- 金三百圓 子爵岡部長職
- 金五百圓 大倉喜八郎
- 金三百圓 大橋佐平
- 金二百圓 岩谷松平
- 金一百圓 横山孫一郎
- 金百五十圓 日本新聞社
- 金百五十圓 日報社
- 金百五十圓 都新聞社
- 金百五十圓 報知新聞社
- 金百五十圓 中外商業新報社
- 金百五十圓 國民新聞社
- 金百五十圓 ヂヤパンタイムス社
- 金百五十圓 萬朝報社
- 金百五十圓 [illegible]川良平
- 金二百圓 高田愼藏
- 金百五十圓 清水満之助
- 金一百圓 北海道セメント株式會社 日本セメント株式會社 淺野セメント合資會社
- 金三百圓 第一銀行[illegible]中
- 金二百圓 田中平八
- 金一百圓 岡村文吉
- 金二百圓 雨宮敬次郎
- 金五十圓 玉塚榮次郎
- 金五十圓 肥料問屋頭取 小澤與右衛門
- 金五十圓 帝國通信社
- 金五百圓 澁澤榮一
- 金三百圓 今村清之助
- 金二百圓 岡本善七
- 金二百圓 山中隣之助
- 金三百圓 加東徳三
- 金百五十圓 時事新報社
- 金百五十圓 日就社
- 金百五十圓 東京朝日新聞社
- 金百五十圓 中央新聞社
- 金百五十圓 毎日新聞社
- 金百五十圓 東京新聞社
- 金百五十圓 やまと新聞社
- 金一百圓 [illegible]谷[illegible]郎右衛門
- 金一百圓 一橋元長
- 金一百圓 梅浦精一
- 金一千圓 東京[illegible]會社
- 三河セメント株式會社 愛知セメント株式會社 鈴木セメント製造所
- 金一百圓 [illegible]賀[illegible]代表人 [illegible]崎正[illegible]
- 金一百圓 江副廉造
- 金二百圓 中澤彦吉
- 金一百圓 森清右衛門
- 金五十圓 太田德九郎

京橋區日吉町十五番地九州倶樂部內
奠都卅年祝賀會事務所

寄附金第貳回報告

- 金一千圓 三井家
- 金五百圓 東京瓦斯株式會社
- 金三百圓 東京株式取引所理事長 大江卓
- 金二百圓 原六郎
- 金二百圓 中井新右衛門
- 金五十圓 石崎政藏
- 金五十圓 武田忠臣
- 金五百圓 東京電燈株式會社
- 金三百圓 渡邊治右衛門
- 金二百圓 岩出惣兵衛
- 金百圓 大江卓
- 金五十圓 伯爵大木喬任
- 金五十圓 服部金太郎

金十圓半田喜八、金十圓松澤孫八、金十圓鈴木銀次郎、金十圓鈴木安兵衛、金十圓清水米藏、金十圓青木儀兵衛、金十圓白石甚兵衛、金十圓西村與兵衛、金十圓松本喜三郎、金十圓近藤利兵衛、金十圓竹內房次郎、金十圓大久保源兵衛、金十圓稻延利兵衛、金十圓岩崎清春、金十圓石井鎌太郎、金十圓東京革商組合、金十圓子爵土井忠佐、金廿五圓東京薪炭問屋組合、金十圓千葉安兵衛、金十圓小笠原長幹、金十圓小野隆通照、金十圓子爵大河內信好、金十二圓岸田候次郎、金十圓河原德立、金十圓唐崎恭三、金十圓粕谷瓦次郎、金十圓狩野惣兵衛、金十圓加太八兵衛、金十圓高井治兵衛、金十圓永井直諒、金十圓長殿茂人、金十圓永富鎌八、金十圓內國商品陳列合資會社、代表人佐野市兵衛、金十圓內田正隆、金十圓松平彥則、金十圓槇品商八、金十圓芦田順三郎、

京橋區日吉町十五番地九州倶樂部內
奠都卅年祝賀會事務所

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上に直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十一年四月三日印刷
同　年四月五日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號本局八八）　國光社

金製指環

●瀧和亭先生考案並畫

●野口小蘋先生考案並畫



一號ヨリ四號迄片切彫甲價二十八圓乙價二十三圓●同平象嵌入甲價三十五圓乙價二十七圓五號ヨリ六號迄薄肉形甲價四十二圓乙價三十三圓七號ヨリ八號迄甲價四十七圓乙價三十八圓●市外遞送料金貳拾錢

◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎

指輪は其人の正札なりとは千載不動の名言男女に限らず其指にはめたる指環を見れぞ。其人の性質品格れのづから現はるゝ事。諸君御承知の通なり。なまじひ其品位を劣す樣なる指輪は。寧ろ指さゞるが愈ぞかし。強に金の量か重くて、寶石か輝きて、彫刻か奇麗なる計で、品格を上るものに非す。品格は金にて買ると思ふは誤なり。假令ろの價は高からずとも其意匠や彫刻が優美なれぞ。何と無く氣高く見ゆて。其人までか奥ゆかしく成ること。是ぞ即ち美術の德なる。本堂深く此に意を注ぎ。金製指輪の製作に意匠を凝し彫刻に精妙を竭し、内外の時好に魁して。殊に高尚を旨と致すなれぞ。優美なるは。勿論瀟洒風流の意氣自然に溢れて。是を指せぞ其品格を進め。其人の性情さこそと見ゆるきつと保證いたすなり。願くは一覽して、本堂が諸君を欺かざる事を知し召せ。謹で白す

明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日…
（印刷所 東京國光社印刷所）